

* 1960年代と私



第1部 はたちの時代 重信房子

第1章 「はたちの時代」の前史として

- 1 私のうまれてきた時代
- 2 就職するということ 1964年 18歳
- 3 新入社員大学をめざす

第2章 1965年大学入学（19歳）

- 1 1965年という時代
- 2 大学入学
- 3 65年 御茶ノ水

第3章 大学時代—65年（19～20歳）

- 1 大学生生活
- 2 雄弁部
- 3 婚約
- 4 デモ
- 5 はじめての学生大会

第4章 明大学費値上げ反対闘争

- 1 当時の環境
- 2 66年 学費値上げの情報
- 3 66年「7・2協定」
- 4 学費値上げ反対闘争に向けた準備

第5章 値上げ反対！ストライキへ

- 1 スト権確立・バリケード——昼間部の闘い——
- 2 二部（夜間部）秋の闘いへ
- 3 学生大会に向けて対策準備
- 4 学費闘争方針をめぐる学生大会
- 5 日共執行部否決 対案採択

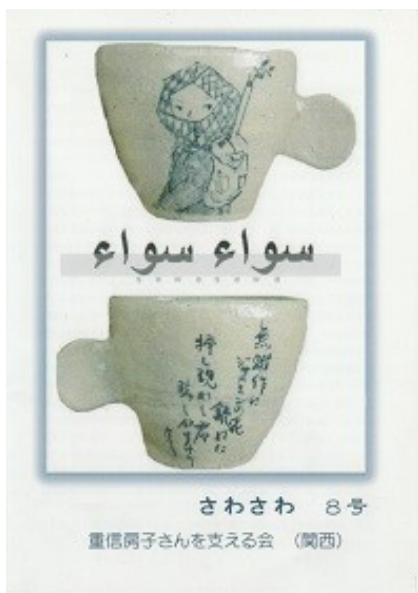
第6章 大学当局との対決へ

- 1 バリケードの中の闘い
- 2 大学当局との闘い
- 3 学費値上げ正式決定
- 4 裏工作
- 5 対立から妥協への模索
- 6 最後の交渉—機動隊導入

第7章 不本意な幕切れを乗り越えて

- 1 覚書 2・2 協定
- 2 覚書をめぐる学生たちの動き
(以降、第2部、第3部執筆予定。)

*ブログ「野次馬雑記」連載 *ピラ写真~WEB「明大全共闘・学館闘争・文速」より掲載*「リベラシオン社」掲載にあたっては重信房子さんの了解を得ています



はじめに

私にとって「はたち」というのは、1965年から66年に当たります。この「はたち」の時代に私は新しい世界と新しい経験に出会いました。学生運動です。その頃のことを「はたちの時代」と題して、関西の友人たちが救援のために発行してくれていた「さわさわ」誌に掲載していました(2009年~10年)。その後同誌が休刊し、このたび友人たちの諒解を得て、発表部分(第4章3まで)も含め掲載します。

第1部 はたちの時代

第1章 はたちの時代 前史として

20歳というと、私たちの世代では、ポール・ニザン『アデンアラビア』冒頭の一節が浮かびます。「ぼくは20歳だった。それが人生で最も美しいときだなんて誰にも言わせない。」20歳が、人生で最も美しい時かどうかはわからないけど、人生のわかれ日や転機の時であったように思います。少なくとも私にとって。

だから「20歳の時代」を自ら描いてみることは、意義のあることだと思っています。当時、ほとんどの人がそうであったように父母の育ててきた家族の中で育ち、又その延長のような学校や近所の小さな社会に棲みついていた私。

その私は、高校を卒業して就職し社会の一員になった時、はじめて異質な価値観に、服従することをもとめられました。それが「世間」というものだと思った時、幻滅し、又、希望のよりどころとして、夜間大学の道を見つけました。

その時、私は18歳でした。この時から、1965年に大学に入学し、新しい自分を信じ、夢をひらいていく、輝く時代は、19歳から20歳に始まります。

働きながら学ぶという決断。そして、大学での新しい人生。そこには、20歳の夢も正義もその可能性も掌の中にありました。サークル活動から、自治会活動、愛情や、学費闘争へ。誰にでもあった20歳の時代を語るところから、あの時の自分を捉え返してみたいと思います。

(1)私のうまれてきた時代

20歳の私を語る前史として私のうまれてきた時代と環境に少しふれておきます。

私は丁度「第二次大戦」の敗北のあとに生まれました。1945年9月28日です。

姉が、私の誕生日の日の古い新聞をコピーして送ってくれたことがありました。新聞の一面には、「天皇陛下 マッカーサー元帥と御会談」というもので、前日に、天皇とマッカーサーの会談があり、その後の新しい日本のアメリカ支配を象徴するような記事が載っていました。

戦後、食料が不足し人々は配給制では足りず近郊農家に食料を買出し、命を繋いでいました。食べることに困る時代に、少佐の退役軍人で、もとは教師の父のちょっとした知識を活かして、素人ながらパン屋を始めながら、戦後の我が家はスタートしたようです。食糧難の時代、イースト菌を手に入れ、パンを毎日作って売ると、飛ぶように売れたようです。

世田谷の馬事公苑のすぐそばの家と、少し離れたポロ市通りにあった店を子供たちの為に一つに統合しようと、父の決断で、家族は世田谷の玉電上町駅近くに引っ越しました。私が2歳～3歳のころです。そこは、大きな角地で、広い庭の一角に「日の出屋」という屋号の食料品店としてスタートしました。

庭には、大きな白桃を毎年実らせる桃の木、数えきれない実をつける無花果があり、ブランコや木のぼりの毎日です。それに父が植えた葡萄棚や、柿、栗の木がありました。隣の家少し高い石垣の境界にむかって広がるユキノシタの中には、大きな蝦蟇(がま)が住んでいました。子供心にも大きくて、じっとみつめる蝦蟇は家族の一員のように見えたものです。昆虫や蝦蟇や蛙、鼠(ねずみ)に蚯蚓(みみず)やおけら、蜘蛛や蟻地獄。それらは子供時代の楽しい遊び仲間でした。

日本は敗戦から、復興へと速い速度で進みはじめました。近所の一段低い地の一角には、ひしめくように、黒いコールタールを塗った家が密集していて、そこは「朝鮮人部落」と呼ばれていました。その土地の話をする時に、大人たちは、声を潜めるのが不思議でしたが、私の父はそうではありませんでした。

私は朝鮮部落の徳山さんや金さんの家に行っては、どぶろくを貰ったり、近所にたのまれて米を買ったり、おつかいもしました。又、反対に我が家の商品を届けに行っては、めずらしくて、家の中をのぞき不思議なアンズ(杏子)の味の飴を貰ったりしたものです。大きくなって知ることでしたが、当時は朝鮮戦争が始まり、日本共産党が武装闘争を路線として、社会革命を求めている時だったのでしょう。朝鮮人たちは晴れ着のチマチョゴリを着て胸を張って行進すると、どの家も、「あぶない!」「こわいこわい!」と家の中に入る、そんな時代です。だから、「日の出屋」が彼らと、地域

の日本人とのやりとりの、つなぎの場だったようです。「日の出屋」というか、私の父が、ご近所から一目置かれていて、いろいろな相談事をうける、そのような役回りをしていたのでしょう。昔から我が家は、考えたことを家族で語り合います(父は1903年の生まれです)。父方の祖父は元士族の漢学者で大変厳しい人だったそうです。臨済宗の基礎となった「碧巖録」を訳した人だそうです。

しかし、父にとっては、父親の前で咳ばらいひとつ許さず、笑わないうちとけない人だったようです。友人が父親とねそべて話をしているのはおどろきで、うらやましかったとのこと。自分が親になったら、子供とうちとけて話すことの出来る家庭をつくろうと考えていたようです。

小さい頃から、何故、月は落ちないのか?なぜ星は動くのか?なぜ花は咲くときをしっているのか。あらゆることを子供たちは質問し、こたえてくれる父を誇りにしていました。又、私たち兄弟は、店番をしている父のまわりで、父の古事記や日本書紀、今昔物語や中国の様々な警句をきくのが楽しみでした。父は小さい時から、天下国家を子供と語り合うところがありました。父が民族運動血盟団などにかかわっていたことを話してくれたのは、67年10・8闘争の日です。それまでは知りませんでした。威厳のある人で、子供心に敬する気持ちがつよかったです。

父はいつも、人間の価値はカネの多寡によって決まるものではない。人間の正義、世の中の為に尽くすことを教える人でした。そんな家族です。私たちは、いつもその対話の中で育ちました。当時の私は、よく交番に花を届ける子供だったようです。

朝鮮戦争後、特需で経済復興の足がかりを得た日本に、アメリカ文化生活のひとつ、スーパーマーケットが各地に出来はじめました。小さな規模のものでしたが、この大量仕入れによる安売りは、我が家のような小さな食料品店を直撃し以降、だんだん経営が成り立たなくなっていました。

丁度、父が癌の疑いで胃の摘出をおこない、結局、店を閉めて暮らし、その後、借金を清算して、町田へと引越して行きました。私が中学の時代です、どんどん貧しくなってしまったのです。その為に、大学を出て、小学校の先生になりたかった私は、商業高校に行き、簿記や算盤のスキルを身につけて、就職することは、その頃もう当然のことと考えていました。中学校を卒業して働くか、と言っていたくらいでしたから。

こうして、子供時代の夢の「小学校の先生になる」ことを捨てて、商業高校に行きました。中学時代までは、少し勉強も出来て、たくさんの夢を描いていました。父の影響で、理科の大好きだった私は、生物・気象部から、中学までは化学部でした。

二つ違いの姉が、中学時代に生徒会長をしていて人気もあったので、彼女が弁論大会や、スプリングコンテストや朝礼で表彰されるのを、恥ずかしく思いつつ影響もまた、受けてきました。詩やものがたりを書いたり演劇部などです。姉のように、弁論大会に選ばれることは苦手で、避けていたのですが、「お姉さんも出来たのだから」と、中学時代は姉の活発さに、まわってくる役廻りを、逃げまわったり、しぶしぶ引き受ける感じでした。

商業高校は何だか先がみえているようで、勉強もしなくなりました。中学のように夢を描いても実現するだけの財政的裏づけがないし…と。小説を書き、渋谷(高校が渋谷にあった)の街で遊び“不良”にもなりきれずに、その分、勉強してみたりと、いう生活です。司書の先生から感想文を書くようにと言われて「橋のない川」を渡されて、読んだ時、不当な「宿命」ということに人間は尊厳をかけて闘うべきなのだ、と強く思いました。

そして、その思いは常々、父の教えに強く結びつきました。それでも自分のいまと、どう生き方が結びついているのか、わからない…。そんな思いの中にいました。

そして、遊び、又、夏休み(63年)には、茅誠司東大総長の提唱した「小さな親切運動」に共感し手伝わせてほしいと参加したり、青年の主張(63年秋)に参加したり、何かをしたいけれど、何をしたいのかわからない、そんな高校時代を過ごしていました。

(「重信房子がいた時代」から転載)

(2) 就職するということ 1964年 18歳



高校時代の房子

高校三年生になると、就職にむけて、学校の体制や指導も重視されていきました。大学進学組はH組1クラスでA~G組まで400人位が自営業か就職試験を受けて、職場を選び、巣立っていくこととなります。昔、私たちの高校は男子校だったのですが、私の時代には共学で男女半分くらいだったと思います。そのうち4分の1くらいが自営業だったかも知れません。

都立一商は昔の東京府の時代の古い商業高校で進学する者は一橋や早大、明治などの商業部に多く、又、自営業者の息子さんたちは算盤簿記を学んで、家業を継ぐ人も多くいます。算盤と簿記は3級の資格をとらないと卒業できません。就職は引く手あまたです。代々、卒業生が職場で実績を残

っていて、真面目・勤勉と企業から求人が多いのです。

当時は、一時期の証券・銀行ブームが引いて、製造業が一番人気でした。生産会社が、高度成長の中で増産増収で企業規模を拡大していく時で、高卒と大卒を、それぞれに企業現場では必要とされていたようです。私たちの高校の卒業生は、企業の、現場の業務、実務の会計簿記・管理などが求められていました。

三年生の二学期くらいから、求人票がボードに貼り出されます。会社名・規模・業種・求人数・給料・条件(算盤や簿記何級など資格技術や、容姿端麗とか背の高さ等まで)、試験の内容(筆記・知能テスト・面接等)などが書かれています。そのボードの中から、クラスの担任に希望を申し出て、成績と照らし合わせて、他のクラスの希望者と調整しながら、まず第一希望を確定していきます。そして、高校の推薦状とともに就職志願書を提出します。

私は、求人票の中で一番給料のよかったキッコマン(当時の社名は野田醤油)か東洋レーヨン をまず、考えました。当時、銀行や証券会社が、その年の、大体平均の給料を示すのですが、1万3500円くらいだったと思います。キッコマンと東レは1万7500円で交通費なども支給・ボーナス3.5~4ヶ月、など書かれていたと記憶しています。当時は、望むところには行けるし学校からの推薦資格がとれる、と担任からも言われていたので、深く考えず、一年目の給料額がよいという理由で、キッコマンへ願書を出すことにしました。

条件には、今ならセクハラで告発されますが、「155cm以上、容姿端麗」とありましたが、担当の先生が構うことないと無視していました。本社は千葉の野田にあり、日本橋小網町に東京出張所があって、仕事場はその日本橋ということでした。

就職試験は、もう忘れてしまいましたが、やはり商業簿記や算盤関連や基礎的な学科もあったと思います。その後、書類と学科審査で合格した者たちが、第二次の面接試験に再び行きます。私

の高校では三人受けて一人が不合格となって、私と、もう一人が面接試験に行きました。一人の不合格の人は、勉強もよく出来る人でしたが、多分、両親が健在でなく片親だった為に落とされたのだらうと、担任の先生が言っていました。当時は、両親がそろっているかどうかなど家庭環境のことも、うるさかったのです。

私たち高校生は、“さか毛”が流行っていて、昼休みや学校の帰りにはトイレの鏡の前で逆毛をたてて、お洒落したものです。就職試験の為の写真には、そんなことはしません。皆、髪をわざと、野暮ったく撫でつけた真面目な写真を貼って、提出します。それでも試験会場に行くと、就職の為にわざと野暮ったくきちんとしていて、あか抜けたお洒落を隠している人は、すぐわかります。大体そういう人同士は、目敏く、友人になるものです。でも、キッコーマンの合格者は、総じて真面目な人が多かったように思います。面接は、数人ずつ、趣味とか我が社を選んだ理由のようなものを聞かれたと思います。

私の家はもと食料品店をやっていて、キッコーマン醤油も売っていたので親しみがあり、給料が一番高かったからと、答えました。そんなことで、スムーズにキッコーマンに合格して入社しました。同期入社は約20人くらいの高卒に10人ほどの大卒の男たちでした。そして64年、高校の卒業式を終えて、キッコーマンの会社はまず、数日の研修を千葉の野田で行いました。4月、入社式の前だったような気がしますが、後だったかも知れません。

研修では野田醤油の社史、工場の見学、新入社員の心構え、業界の現状などが、教えられます。「修養団」から講師が来て、女性は、男をたてて生きるとか、はじらいをもって振る舞い、笑顔もとやかに、などという講義もありました。老男性講師の、婦女道みたいな話です。講師が去ると「古いねー、何考えてんだらう」など笑いがありました。

それから、適正テストもありました。(これはもしかして、入社の時だったかも知れません。)夜、研修所の和室に、広々と、修学旅行のように布団を敷いて泊まったように思います。今となっては、それもおぼろげです。とにかく仲良くなった新入社員の他の高校から来た同年の仲間たちと、「婦女道にはまいったね」「あの話、古いわね」「今時、あんな話きく人いるのお?!」などと笑い合いました。又、大きな私たちの背丈の二倍もあるもろみの大桶に落ちて死んだ人もいるとか、野田の地元の高校出身の人が語りだすと、ネズミの死骸があったとか、キヤーワーと楽しく大騒ぎの話です。

最後の日に、この研修についての感想文を書かされました。数日して、確か入社式があったように思います。S人事課長から一人だけ呼ばれました。

「あの研修会なあ、『結構なお話でした』と、書かなかったのは君だけだよ」と言われてびっくり。え！みんな「古いわねえ、私たちにそんな話をしても意味がない」など言っていたのに……。と心の中で思いました。

「君にとって本当のことでも、それを言って角を立てるのは、どうかな。」とS人事課長は笑って言いました。彼は訛りのつよい高卒のたたき上げで、課長どまりの停年まじかの実直そうな人です。S課長は「ハイハイと結構なお話でしたと、従っておくものだよ。これからは気をつけなさい。」と言いました。そのあと声を潜めるように、「テストによれば君は創造的か社交的な仕事が合う。「受付」か「企画」を考えているが、受付接客は好きかね？」と訊かれました。「いいえ、受付接客よりも、何か業務をやってみたいです」とこたえました。呼び出されたのは私一人です。

戻ると、「どうだった?」「何?」と、みんな興味津々で訊くのです。感想文の話をする、「えー?!『古い』なんて書いたの?!」と、みんなどっと笑いました。そうか…思ったことを、そのまま言っただけなのかな、「結構なお話でした」と、みんな本当に書いたのか…遅ればせに「世間」という現実に触れた思いでした。そして幻滅しました。

私だって、対決的に、意見を批判として書いたわけではない。我が家でも和を大切にすることだし、そうして育ってきた。でも、自分の率直な考えをなぜ言っただけなのだろう。みんなも、なぜ言わないのだろう。この戸惑いが入社の一歩になりました。

(3)新入社員大学をめざす



こうして、高卒の女性が、受付や庶務、電話交換手、売上業務管理、データ計算の業務課、キーパンチャーなどの、男性の補助的な役割の多い中で、出来たばかりの食品課に配属されました。ここも男性の補助的なしごとでしたが、責任を持てる業務でした。

キッコーマンはアメリカに進出するための輸出課を持っていましたが、カリフォルニアを目指した輸出課を通して業務提携の出来たデルモンテ社と三井物産、それに博報堂が組んでデルモンテ商品の日本上陸計画を始めました。このデルモンテの日本での販売の為に作られたのが、食品課でした。デルモンテケチャップをどう売るか、デルモンテトマトジュースをどう日本人に飲ませるか、それを企画宣伝・販売実績を上げて、フォローアップしていく為の新しい課として出来ていました。

ようは、米企業の先兵です、今から考えると。その為他の課と違って市場調査や宣伝企画、試食会のマーケット見学など博報堂などと協力して、やりがいのある仕事です。課長はとっつきにくそうな本当はやさしい慶応ボーイ、主任は企画力も能力もある早大卒、それに営業のエリートの大学卒の数人と高卒の人が営業、他に高卒の頭のよさそうな真面目な人が業務計算を仕切っています。

女性は、課全体を円滑にすすめる役処で、主任の秘書的な庶務役を、仕事の出来る女性が一人で取り仕切っていました。10人の課です。そこに、私は配属されて主任や女性の指示に従って、業務を行いはじめました。

デルモンテを売る為に、「ケチャップのラベルを送ってきてくれた人には、先着1000名様にシームレスストッキングを一足送ります。」などと、キャンペーンを張り、売り上げを伸ばしていました。当時、貴重品だったシームレスストッキングを次々と送ったり、スーパーのディスプレイをチェックしたり、博報堂の持ってくるポスターやデザインに課の意見をまとめたりと、かなり楽しく仕事をしていました。きっと今も当時決まったコマーシャルソング「デルデルデルデルモンテ太陽のおくりもの」をつかっているのでしょう。

又、キッコーマンは「女性のたしなみ」を大切にすることだし、お茶とお花は5時の就業終了後、週一回、半ば義務的に講習を行っていました。勿論無料です。又「野田争議」として有名な労働争議が起きたことがあったとかで、以降はがっちりと会社の役に立つ組合がつくられ、そのもとに組合活動がありました。

当時はそうした由来も知らず、労働者の権利、婦人の権利の為の組合というので誘われて、顔を出してしまいましたが、「茂木社長の配慮によってこんないい環境になった」というような話で、うんざりでした。それでも「野田文学」だったか、野田本社にあった文芸サークルと交流して、詩を書いたりしていました。

そんな時、食品課の高卒の男性が、中大の夜間大学に通っていることを知りました。又、業務課の女性が一人、法政大学の夜間に通っていることも知りました。この二人の話は、吃驚するほど嬉しいものでした。「夜間大学」！世界へのつてのない我が家には、そんなことを教えてくれる人はいなかったし、知りませんでした。又、父は、自分の大学に学んだ経験から、学問は社会で学ぶ方が良く考える人だったので、大学入学の興味や知識もなかったのでしょうか。絶対に大学に行こう！二人の話を聞きながら、熱く決意しました。

そんな64年の秋、突然、私は病気になってしまいました。

通勤の途中で、お腹の激痛に襲われてしまって気を失いそうになり、小田急線の向ヶ丘駅に途中下車して、駅の和室に連れ込まれました。町田の自宅からバス停へ→バスで小田急線の駅へ→そして町田から新宿へ→新宿から東京駅へ→東京駅の八重洲口からバスに乗って日本橋小網町へ、というのが私の通勤経路です。いそいそでも自宅から1時間40分程かかって職場にたどり着きます。

その途中の向ヶ丘遊園で降りざるを得なかったのです。会社に電話を入れて、駅長室で休んでいるうちに痛みも治まったので、町田の自宅に戻って、病院に行きました。自宅に近い、町田中央病院です。

そのまま検査入院をしました。数日の検査の結果、どこも悪くないし又、痛みも、ケロリととれてしまいました。そこで、退院の支度をして、お金の払い込みを母がやりながら「最後に何も無いと思うが、産婦人科でちょっと診てもらいなさい」と医師に言われて、産婦人科で診察すると、ここで初めて、卵巣嚢腫だと診断されました。こぶしくらいの大きさの嚢腫があるので直ぐ手術しないと又、いつ激痛に襲われるかわからないとのこと。又、病室に戻って、今度は、手術の体制となりました。この当時、日本中は東京オリンピックが始まる騒ぎの最中でした。

私は丁度良いチャンスだと、大学受験の問題集などを持ち込んで集中して受験勉強することにしました。手術し、受験勉強に熱中していると、同部屋の患者のラジオからオリンピック中継が流れてきます。アベベがマラソン一着になった中継やバレーボールの金メダルの応援など聞きながら又、勉強を楽しんでいました。

私はオリンピックよりも、先生になれるという人生の、目標に向かって、自分のオリンピックを実現するぞ！と、気持ちは晴れ晴れしていました。

64年、9月生まれの私は10月10日からのオリンピックの時には、19歳になっていました。私は姉や父や母に、すべての私の問題意識を語ってきました。でも、勉強して、大学に行くことは姉以外には、くわしく話しませんでした。もちろん父も母も知っていましたが、私が受験に受かってから、両親には自分から言おうと思っていました。自分の力で生きていくこと、19歳の私は一歩踏み出す希望に、その喜びを込めてすすみました。

1965年。受験して、大学に入る年。この年、私は19歳から20歳になっていく年です。

第2章 1965年 大学入学

(1)1965年という時代

1964年10月のオリンピックを契機に様々に「戦後復興」から「繁栄の道」にすすみはじめるスタートラインが1965年といえるでしょう。その社会的ひずみや矛盾が顕在化していきます。学生運動が正義や真っ当な社会を求めて闘う故がありました。

オリンピックにむけて、東海道新幹線が開通し、日米海底電話ケーブル、名神高速道路などインフラ整備がすでに行われてきました。米国の占領政策に組み込まれた日本は、60年安保を経て、アメリカの意向に合致した勢力が国家暴力装置を強化し、日本の舵を握る構造が定着しはじめていました。

岸信介ら、かつての戦前の支配勢力が親米勢力として転向し、政界・経済界に再編されて残りました。戦前の官僚支配のシステムも又、再編されつつ日本はそのまま残されました。かつては軍の意向に鉛って、戦後は、米軍基地の存在にみられるようにアメリカの意向に沿って日本は、歩きはじめたのです。国内のインフラを整備しながら、よい技術でよいものをつくり、海外に市場を求めていく年として、65年は、画期をなしています。

64年に佐藤内閣が成立し、1965年に日韓基本条約が6月に調印されます。この条約は、これまでの国内の生活と生産に忙しかった企業が海外アジアに経済進出していく足がかりとなる条約です。アメリカを介して、韓国と反共戦路のもとで戦前の日本のアジア侵略を清算しアメリカの傘の下で協調することを示したものでした。米国の反共戦略の仲介と利害なしには、日韓条約は成立しなかったでしょう。日韓条約に象徴されるように、アメリカの反共路線下のアジアの融和をめざし、日本は経済進出を計っていく時として、1965年がありました。

又、国内的には、当時は、衣食住において、いまだ一般国民は貧しい時代です。大学に行けるのは、わずかな層であった時代から、このころには、無理してでも子供を大学に入学させて、将来の子の出世を夢見る庶民も多かったと思います。

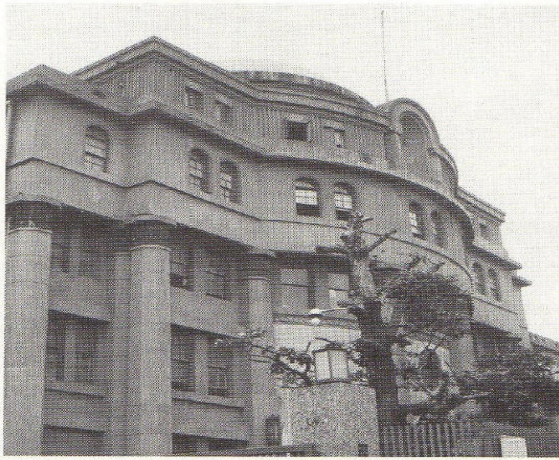
又、支配の側は、新しい国づくりにふさわしい人材育成を「期待される人間像」で語り、文部行政にみあった産業に役立つ人材を育成することを考えています。国に奉仕する軍人から、会社に奉仕する人間づくりです。そして又、大学の経営を安定させるために大学生の大量生産(マスプロ化)と授業料の値上げが頻発しはじめるのもこの年です。

60年日米安保条約に反対して、市民・青年・学生・野党が闘いながら敗れた後、その総括をめぐって沈滞していた運動も、基地反対闘争、日韓条約反対闘争として盛り上がりはじめていました。65年1月に米軍による北ベトナムへの北爆がはじまり、ベトナム戦争に反対する国際的な世論が生まれてきました。反戦平和をもとめる市民・労働者・学生の声が高揚し、騒然としはじめました。

そんな65年2月に私は、お茶の水の駿河台校舎で入学試験を受けました。19歳の私は、18歳まで町田から通っていた高校のあった、渋谷や新宿には馴染みがありました。又、東京駅から、日本橋の妙に静かな小網町や水天宮、人形町辺りのキッコーマンの職場の周りも馴染みがあります。

でも、お茶の水は通勤で電車で通ることが時々あっても、降りたことはありませんでした。お茶の水駅の改札を出て、駿河台の大学へと願書を取りに足早に歩いた時にも、時間に追われている日々で、それ以外あまり印象はありませんでした。でも、歩道をはみ出すほどの学生たちが行き

交い、昼間から、楽しそうに語り合っ、そこここに一杯なのには、驚きました。学生街とは、こういうものかと。労働しなくても学べる人たちが多い街なのだと、実感したものです。



(2)大学入学（明治大学記念館）

夜間大学の入学。当時は、ほとんどの受験生が入ることが出来たのではないかと思います。難しい問題が出題されたという記憶もないし、とても易しかったように思います。市販の入試問題集を解いては、当然受かるだろうと思っていました。

それでも合格発表の日、貼り出された受験番号を見た時は、ホッと嬉しかったものです。合格の番号を確認してから、父や母に、明治大学の夜間部に行くことと告げました。

確か、受験票と引き換え又は見せて、入学金の払い込み用紙や学校案内など一式を受け取りました。その時、机を出して明治大学のバッチを売っていました、私は小さな白いMを象った明大のバッチを買いました。大学生になれたこと。それは、これから先生になれることと同義語であり、誇らしかった思いが、それを買わせたのでしょう。

それから、何日かして、入学金の払い込みに、再び大学に行きました。もう、入学式を間近にひかえていた頃だったと思います。

まだ少し寒さの残る御茶ノ水駅に降りて、人波の続く駿河台の方に向かって歩きました。大学院校舎の前にマットを敷いた上に胡坐(あぐら)をかいた数人のよれよれの服装の髪のもじりもじりの男たちがいました。何か異様でした。

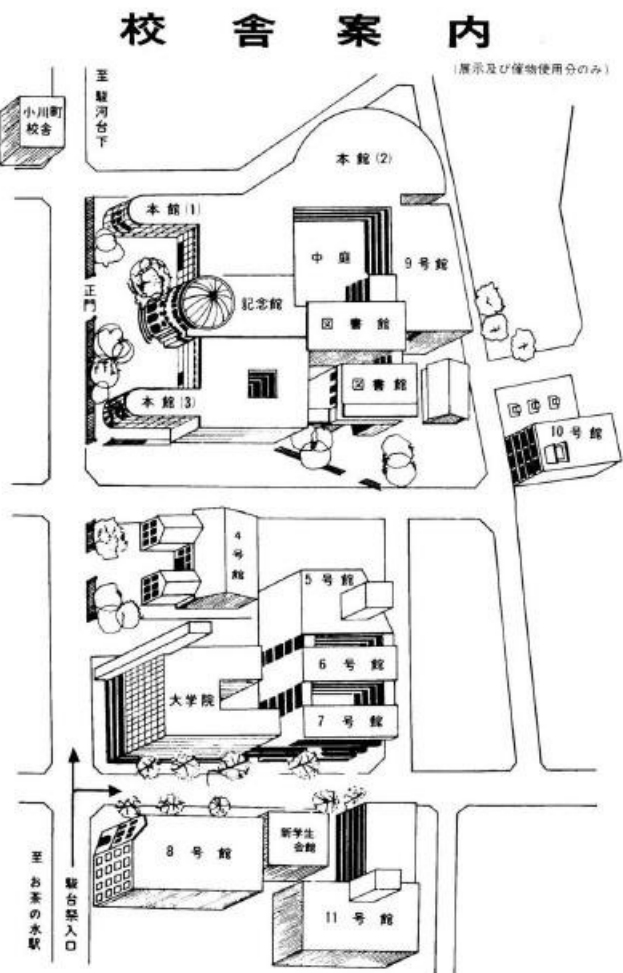
そのうちの一人は、ハンドマイクで演説をしている。立て看板や旗がありました。もうよく思い出せないのですが、「不当処分上杉君の復学を勝ちとろう！」というようなことが立て看板に書かれていました。立ち止って、読んでいると、不当処分について男たちは口々に説明し「一緒に座りませんか?」と私を誘いました。自分のためではなく、次に 入ってくる学生たちの為に、学費が管理費か値上げされるのに反対して闘っているという話です。他人の為に尽くしたそうした人が処分されるなんて不正義ではないか。彼らの言う通りだと思いました。そんな風に知り合った人々が、文学部と政経学部自治会にいた反日共系の学生たちだったのです。

明治は当時、昼間部の自治会はずっと 60 年安保闘争の時代から反日共系の人々が引き続き担っており、夜間の二部の全学自治会の学苑会は 60 年安保の後、それまでの反日共系から、日共系の人々に渡っていたようでした。

学苑会の主流の日共系に属さないこの人々が政経学部の自治会と文学部の自治会の人々で、それが反日共系の人々の残された拠点だったようです。当時は、私は日共も反日共も知らないの、
「人々の為に尽くした人が当局によって処分されるのは、おかしいではないか?」という素朴な考えから、この人々の話に共感を持ったに過ぎませんでした。

キッコーマンの仕事は、デルモンテの拡売が軌道に乗り出して忙しかったし、丁度、出来はじめたスーパーやデパートの食品売り場で私もディスプレイしたりしていました。又、その調査にあちこち現場に出掛けたりと楽しかったのですが、残業が出来ないごとは心苦しいことでした。又、会社は、

将来を見越して、ワインを作って売るために私たちの食品課の隣に「キッコー食品」を新設しました。この「別の子会社」の形をとった「キッコー食品」は牧歌的です。いつ出来るかなど、勝沼ワインの夢を語り、輸出課から天下ってきた「キッコー食品」のトップの外国滞在の長い石川部長から、大学行きを励まされたり、居心地は悪くありませんでした。大学も又、会社も楽しく生きがいの夢に向かって走り出していました。



(1970年当時の明大駿河台校配置)

(3)1965 年お茶の水

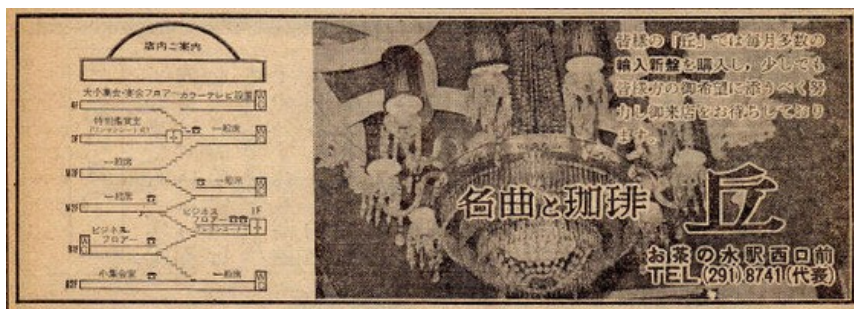
2000 年のある日、降りたって歩いてみたお茶の水駅は、ちっとも昔と変わりありませんでした。駅のホームというのは、一番変わらない記憶の地図の砦のようです。ホームに立ってみると、当時の方位や情景を、正確に思い出すことが出来ます。お茶の水の明大通りは昔の面影のまま、そこにありました。

当時、職場の日本橋から東京駅ハ重洲口を通り抜けて、中央線で東京駅から高尾行きに乗ってお茶の水のホームに、いつも急ぎ足でした。お茶の水駅で降りて、階段を駆け上がり古い改札口を抜けると、すく、活気のある大学の街。聖橋口は、中大の学生たちが溢れるのですが、明大の私たちは、反対の駿河台通りに向かう出口です。この二つの出口の間は、ホームの長さに並行して、喫茶店・焼肉屋・楽器屋・画材店などが並びその対面の駅前にはパチンコ屋や喫茶店が並んでいました。

駅から明大までの 100 メートル程の道は純喫茶とか、名曲喫茶と呼ばれた「丘」とか「穂高」とかが並び、マロニエ通りへと折れる角が、学生会館の旧館です。

旧館に続くブロックは、大学院や短大、本館と続き、駿河台下までずっと、明大の敷地が続いていました。マロニエ通りに折れると、大学院の裏は文学部の校舎で、右手に新学生会館と商学部校舎がありました。左に折れると法学部の建物や山の上ホテルに続きます。法学部の校舎の坂道の下は錦華公園になっていて、神田古本祭りの賑やかな会場にもなります。

(喫茶店「丘」の広告)



入学した当時は、5:00の会社の勤務を終えると、すぐ大学へ急ぎます。明大に向かうお茶の水駅から、足早に旧学館の

横を曲がるとすぐ、大学院の建物の横の入り口から、文学部の授業のある建物に入ります。入ってすぐ掲示板で、今日の授業のプログラムを見ながら教室へと急いだものです。

今日の仏語の授業は休講だとか、教室の変更とか、掲示板には、貼り出されているからです。急ぎ足で、夕方5時に職場を出てお茶の水駅から大学に5時半すれすれに着くと、まず、その掲示板を見ながら、教室へ急いだものです。

新生生のオリエンテーションを受けた後で、高校のようなクラス担任が居た記憶がないのですが、日本史科のクラスにはまとまりがありました。日本史科の先生が、当初は、コンパにも来てくれたような気がします。入学式直後からクラスで自己紹介をしあつたし、世話役を決めて、コンパも飲み会もゆったりして仲間意識が育ちました。夜間大学だったことは、今になってみれば、とても有意義な貴重な体験だったと思います。昼間は何をしていますか？溶接工ですとか、郵便局員ですとか、自衛官や警察官もいました。公務員も多かったです。

夜学は、地方から、高卒で東京に就職してきた向学心の強い村の優秀な青年たちの溜まり場でもありました。クラスで討論し、職場の苦勞を語り、下宿や就職の世話をしあつたり、クラスやクラスを越えた友だちがひろがっていくようになりました。

サークルも又、同好の志の集まりで時間が限られている分、みな真剣です。今の時代と追って、戦後の、新しい体制の中で、政治的・社会的にも体制自体が安定しておらず、国民の衣食住において貧しかったし、こんなに物が溢れてもいませんでした。まだ、「正義」や「反体制」の主張が、60年安保闘争を経て、国の意見を二分するような勢いのある時代にありました。

明治大学では、60年の、日米安保条約改定に反対して、学長自身が、全学ストを呼びかけて、正門をロックアウトし、紫紺の明大旗を掲げて校歌「おお明治～」と、歌いながら数千が参加して参加者の一部が国会に突入したのは有名な話です。国会へなだれ込む先頭に夜学の紫紺の学苑旗が、なびいているのを毎日新聞映画ニュースで、6、15 記念の日に見たのは、入学した年か、その翌年でした。

私が入学した年は、60年安保闘争の敗北から、新しい闘いに向けた上り坂の時代の65年にあたります。また日韓条約が締結批准され、65年、1月には、米軍による北爆が始まる年で、一挙にベトナム戦争反対と日韓条約反対の運動が盛り上がっていく国際的な時代の中にありました。加えて、学費値上げ反対闘争が、既に慶応、早大で始まっており、反戦反米反基地闘争と重ねて、学生運動も又、ラジカルにならざるを得ない状況にありました。

こうした環境の中、日共系も反日共系もクラス討論に、授業前の教室に入れ替わり入ってきては、時事問題を語りビラを配っていました。クラスに入ってきてアジる反日共系の方は、大学院の前に座り込みをしていた人々でした。

60年安保以来の生き残りの方々も居ます。このうち一部の方々は、田安門から入っていく皇居のなかにあつた旧近衛兵の宿舎だった「東京学生会館」を根城にしていました。この戦前の近衛兵の兵舎を戦後、学生寮に使っていたものです。皇居の堀の内側が、学生運動の拠点になっていたのも、追い出そうと政府は画策していました。明大の学生たちも時々集まったり、学習会などをしていました。

一度、1年生だった私たちは何人かこの東学館の学習会に連れて行かれたことがありました。あまりの暗い雰囲気と希望のない顔つきのよれよれの人たちにその雰囲気のまま一方的に話しまく

られて、二度と行くまいと、クラスの友人と話したものです。この人々が反日共系のMLとか中核の人だったらいい。日共系の人々は、二部の学生自治会の学苑会を牛耳っていて、自分たちが正当に選ばれた自治会の執行部であり、中央執行委員会のもとに、開催されるベトナム反戦や、日韓条約に反対する学苑会主催の行事に参加するようにと訴えていました。

彼らは、反日共系の人々と違って身ぎれいにして、話し方も、ソフドだったのですが、私にはわざとらしく感じられました。サークルでは、社会主義研究会や民主主義科学研究会などに属していて、「赤旗」を宣伝し、民青の新聞を配ったり売ったりしていました。

夜間の学生たちは午後5時30分に授業が始まり、9時50分くらいまで、3単位くらいの授業を受けます。その後終電まで思い思いに自治会やサークル活動で活気があります。授業は、教室が固定しているわけではなく、選択した自分の授業のある教室へ急がねばなりません。こうした教室の入れ替えの始まりに、反日共系の文学部自治会と日共系の全学自治会の学発会の、ピラや演説が授業までの短い間に、学生に語りかけオルグするのです。

時々、両者が教室に鉢合わせして、怒鳴りあいすることもあります。誰に頼まれたわけでもないのに、よくやるなあ…というのが、当初の私の感想でした。私は、誘われたら時々、日共の友人にも反日共の友人にも顔を出すけれど、これといった熱意があったわけでもなかったのです。ことに、文学研究部に入って、詩や童話、小説を書きたいと思っていたのでなおさらです。

勧誘の熱意に時々つきあうというくらいでした。4月の入学から夏の間は、キッコマンの仕事のサイクルと大学のシステムを学び、何事にも興味津々に関わりました。ただ、先生になる！先生に成れる！と喜び一杯だったのです。

私のはじめてのデモは、5月か6月、出来たばかりのベ平連の米国のベトナム侵略北爆に反対するデモです。小田実のシュプレヒコールに合わせて、歩きながら芝公園に向かいました。この時、少し白髪の「おじさん」と、もう一人の人がデモで歩きながら、ちょうど私たちの隣にいました。私はクラスメートと二人で中ヒールにスーツのOLスタイルです。「どうして参加したの？」と話しかけてきました。私たちが、「デモは初めてです。今日デモがあるのを大学の掲示板で見ましたから。」と言うと、私たちの横を歩きながら、ベトナム反戦の意義を語ってくれました。私たちは初めてのデモが嬉しくて、ミーハーのノリでカメラも持っていました。芝公園まで行進した後で、そのおじさんと一緒に写真を撮りました。ずいぶん後になって、この「おじさん」が、いいだももさんと、開高健さんだと、写真を持っていたので気づきました。

初めてのデモはとても小さなものですが、達成感がありました。私たちはただ、何キロメートルか、みんなにくっついて歩いたに過ぎなかったのですが。

第3章 大学時代—1965年

(1)大学生活

大学に入って、私が当初もっとも興味を待ったのは、文学研究部と雄弁部でした。文学研究部は、私自身高校時代には、文芸部で、短篇や詩、作文などを書いていたし、キッコマンに入社してからもその気持ちが残っていました。千葉の本社の文芸誌「野田文学」を発行しているのに参加していたので、その延長上に興味をもっていました。

史学科なので小学校の先生か歴史の先生になり、歴史上の人物で悪者とかいわれている人々に実は、悪者ではなかったのではないかと、とか、歴史の敗者を、公正に浮かび上がらせるような小

説を書いてみたい。そんな思いもあって、文学研究部略称「文研」に入りました。このサークルの人たちは、ほとんど進歩的ながらノンポリで、いわゆる日共・反日共の政治活動には興味を示さず、もっぱら、純文学中心の系譜のようでした。

1960年、倉橋由美子が『パルタイ』で、明治大学の学長賞を受賞し、その後、文芸誌に転載され、芥川賞候補になったことから、それに続こうとする気概があったし、かなりの書き手が何人もいたようでした。

明大には、本多秋五や舟橋聖一なども教授陣にいたし、近代文学の戦後の主体性論争とか「近代の超克」とか「文学における戦争責任」など講義や討論や小林秀雄論など、それぞれが、分科会で、学習研究していました。各々が作品を書いては、その作品の品評を行い、また「駿台派」という文研の同人雑誌を発行していました。

私は、高校時代『橋のない川』を読んで、こんな世界が日本にあったのか…と差別支配に大きな驚きを受けて以来、高校では、差別とか人間の葛藤を子供の目線から、いくつか短編を書いてきました。それで、そんな作品からまず書き始めてみたかったのですが、文研は、そういう児童文学の雰囲気はありませんでした。

丁度、新聞で児童文学「こまの会」という会合が、水道橋辺りであると知って、どんなものか行ってみたことがありましたが、失望しました。身内の人々らしいわけのわからない会話を交わしながら、煙草の煙もうもうとする中で、児童文学に関する話は、一向、出てこなかったためです。19才の私は、失望してしまいそれっきりでした。

それで、当面は詩を書くことにしました。高校時代に、書いていた延長上のものですが、情念を言葉に置き換えてみたかったからです。後に65年、明大新聞に一年生の時、短編で応募したこともあり、『くちなわの声』という小説です。

本当にあった話ですが、日韓闘争のデモで、国会前に座り込んだ時のエピソードです。スクラムの隣にいたはずの友人が機動隊のごぼう抜きの実力行使が直ぐそばに迫った時、いなくなっていました。後に、彼は被爆者で、白血病だと告白し、血が止らなかつたらどうしようと、怖くなった話をしてくれました。その時のことを書いたのです。

阿部知二教授から、なかなかいいから書き直して持ってくるようにと、幾つか指摘されましたが、そのままにしました。何かそこまで熱中して短編を書き上げる気持ちが失せてしまったようです。中途半端でした。

(2)雄弁部

それからもう一つは雄弁部でした。私は、雄弁を好きだったわけではなかったのです。それでも小学校時代ラジオを聞きながら、好きだった秋山ちえ子さんみたいに自分の考えを人に語れる人がいいなと思っていました。弁論で、人を感動させることにだんだん興味を持ちました。

私が弁論をやるようになったのは、姉の影響です。高校になって、一年生の時、弁論大会で「学生の特権について」の題で弁論大会のクラス代表の役を指名されてしまいました。姉に論旨を書いてもらい丸暗記して、優勝したことがありました。やりだしたらおもしろく、高校三年生の時、「青年の主張」にも参加しました。

その延長で、大学でも雄弁をやってみたいと思って部室を覗いてみました。ところがこの、明大雄弁部はマッチョの溜り場のようなところでした。当時、何処の大学雄弁部も同じだったのですが、

政治家を目指す人々の集まりのようでした。政治家になるための、演説の弁論、しかも、マイクを使わない地声の、明治時代の演説会を思わせるバンカラです。良く声が通るように発声練習などをしていて、女性の部員は一人も居なかったのが、がっかりでした。

しかし、当時は、大学の弁論部は、各大学、全国の弁論大会があるので、同期の交流もあります。各地の選挙運動に呼ばれるし、弁論部は引く手数多のアルバイトの出来るところでもありました。

私は入学してすぐの4月か5月に、インド大使館主催のネール記念杯に応募しました。「論文審査が一番で通りました」といわれ、いい気になって弁論大会に臨みました。早大大隈講堂で決勝大会が6月頃行なわれました。「ネールとガンジーの非暴力による変革」が私の論旨でした。会場一杯に、早大生を中心に人々は溢れかえっていました。

しかしマイクのない旧来の雄弁方法の大会でした。私は、マイクがないと遠くまで声が届きません。発声練習もしていないので、論旨はよくても、弁論で一番にはなれませんでした。私の弁論を野次った人が「野次賞」を獲りました。「ディスクジョッキーじゃないぞ！」という野次だったのを憶えています。

私が、このネール記念杯に参加したのは、優勝がインド招待だったので、インドに行ってみたくという思いからでした。ガンジーを読み「非暴力の変革」を貫いた姿勢に共感したためにその「非暴力による変革」を論旨としたものです。

当時は、大学弁論部には、東京でも女性がほとんどいなかったのが、ネール杯以来あちこちから、何処で聞きつけたのか、明大雄弁部に、選挙のアルバイトが舞い込んできました。各地の選挙の為の“ウグイス嬢”とか“女弁士”のアルバイトです。

私も神奈川・福島・町田など興味津々で、他の大学の雄弁部員と競い合って演説したものです。不思議なもので、事務所に行って話を聞くと、この候補者は落ちるだろうというのは、直ぐにわかります。それでも、高額(当時でも一日1万円位)で引き受けるのです。その候補者の取り柄や略歴を聞いて、それから演説用の短い論旨を三つか四つ練り上げて、候補者にくっついて車に乗ります。駅前とか団地で、車を停めて降りると、私たち弁士は、数人のサクラの聴衆を始まりとして、より多くの聴衆を集める為に熱弁を振るうのです。

準備した論旨を順に叩き込んでいて、臨機応変に、幾つかのバージョンを切々と語り、そして、候補者を紹介します。候補者をたてるのもなかなか難しい。もうこれは、望みないなどと判る場合でも、アルバイトの雄弁部の学生同士では、どっちの応援演説が聴衆を集めるかとか、どっちの話が団地の窓を多く開けさせるかとか、競い合うのです。

夜、私たちの演説が始まると、明かりの点いた団地の窓が、がらりと開いて聞いてくれるのです。そのために、訓話とか、歴史話とか、聞き耳をたてたくなるように話を続け、最後に候補者を持ち上げる方法を使いました。私も、早大や中大の雄弁部の弁士と何度も団地の窓を開けさせる演説競争を楽しんだものでした。

そんな楽しいアルバイトは、私がキッコーマンを辞めてからでしたから、66年くらいからだったと思います。66年、20歳の時、町田で“私は二十歳になりました。初めての選挙です。二十歳の私の投票したい人を見てください”と友人の父親の応援演説をやっていました。

(3) 婚約

こうした活動を通して、65年から66年にかけて、私はある大学の仲間と結婚しようと約束しました。外国に行っていた彼が帰国するのを羽田で待っていたある日のことです。たまたま隣で雑談していた、地方から息子を迎えに出てきた田舎のおじさん風の紳士が、偶然、彼の父親だったので

す。彼が、通関して来合わせて、父親と知ったのですが、父親は地方の自民党のボスでした。私のことを、‘政治家の妻に相応しい。直ぐに手をつけろ。貧乏人でも素性がかまわん’と言って、当時、定宿にしていたホテルに部屋をとったというのを、息子である、誠実で真面目な彼から聞きました。それを聞いて、無礼千万とカンカンに怒った私は、帰ったのですが、それがまた、その自民党ボスの父に気に入られてしまったようでした。そんなことを経て、二人の間では婚約することにしました。

「世の中を良くしたい、日本をかえて、もっとよい社会にしたい」。それは、父と語り合った私の願いであり、また政治家を目指す彼とも、共通の願いでした。この65年の頃には、ガンジーを語るように私には、変革の方法はあまり分からなかったし、左翼的に物事を考えていたわけではなかったのです。フィアンセと日本をより良くすることをお互いに語り合い、父親が来ると一緒に派閥のボスの屋敷にもついて行ったこともありました。

学費闘争が66年に始まると、だんだん「世の中を良くする」方法や実現の仕方において二人の間に、埋めがたい溝が出来たように感じました。私は自民党内の変革では貧しい人々は救われることはないと思いました。

大学で先輩たちから習い始めた「階級」や「革命」をリアルに実感し始めていました。彼は、寛大にも、私に自分の信ずる道をすすむことに賛成だと言いました。「でも日本は、暴力革命も受け付けられないし、自民党の改革以外に変化は、あり得ない」と主張していました。彼は、金持ちだったから根源的な貧しさを分かっていないなあ、そんな思いで距離が出来ていくようになりました。婚約者と会う度に論争し、論争する度に、私には、よりラジカルな革命こそ求められていると、思いを深くするようになりました。後に、こうして婚約を一方的に私の方は取り止めてしまいました。

彼は、「君が、今の左翼的やり方では、日本を良くすることは出来ないと考え直して、戻ってくるまで、待っているよ」と、笑っていました。後に彼は父親を継いで政治家となり、議員になりました。2000年に逮捕された時、何処で聞きつけたのか、検察は、ある議員の名をあげて、婚約者ただだろう、と聞いていました。とにかく雄弁部の世界は、政治家に繋がる世界で、それもまた、当時の私にとっては楽しい世界でした。

(日韓条約反対デモ 1965.6.22)



(4) デモ

文研と弁論、加えてクラス討論や夜学研のメンバー(夜学研というのは夜間大学の学生自治会の連合をめざしていて、昼間部の全学連と違って、働く学生たちの自治や改善、連帯の為の研究サークルのようだった)

と社会や世界を語り大学の学問の自由や自治を語ることが生きている実感のように楽しいものでした。

そんな中から、ベトナム戦争に反対して、5月か6月、初めてベ平連のデモに参加しました。それから後、日韓条約反対のデモが激しくなり、文学部自治会に誘われて、国会に向けたデモにも参加しました。国会通用門のところに座り込み、国際学連やインターやワルシャワ労働歌を歌いながら、お互いに地面に座ってスクラムを組んで、ごぼう抜きに抵抗していました。

「斎藤君！都学連委員長の斎藤君、君ら学生たちの行為は違法です。直ちに解散しなさい。解散し、引き揚げない場合には、実力を行使します。」

投光機が放射状にデモ隊を焦点に光を投げかけると、夕暮れの暗闇に浮かび上がった都学連委員長の斎藤君(明大・66年初代再建全学連委員長、後に明大学費闘争のボス交によって失脚した)が、当時の公開録音のプロデューサーのように、右手を振り上げてまわし、抗議の仕草で合図をすると、何百人～千人位の座り込みの学生部隊が呼応します。

「ナンセンス！我々は闘うぞ！」と機動隊に向かって叫ぶのです。夜の真剣勝負は荘厳でした。その野外劇場のような情景に圧倒されます。

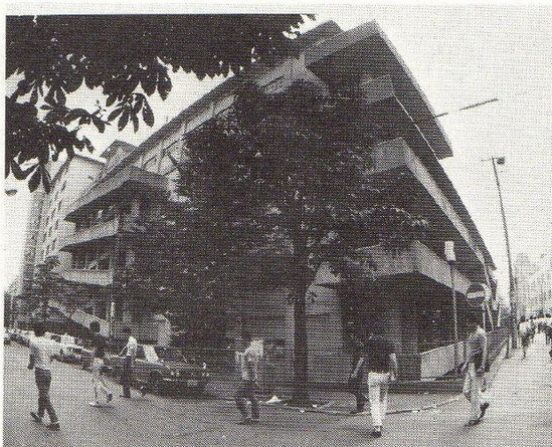
そのうちに、「これから君たちを排除します！」と、警察は宣言すると、座り込みの私達は、ぎゅっとスクラムを組んで互いに繋がっている隊列を、さらに強く握り合います。そこへ、機動隊が、ゴボウ抜きのように引き剥がしながら排除していくのです。引き剥がすと二人の機動隊員が一人ひとりの両腕を捕って100メートルほど先の交差点の方に連行し、そこで放します。私たちは、また、知らない者たちとスクラムを組み反撃しようとしてデモの隊列を組む、というイタチごっこが続くのです。そんな風に、日韓条約批准の頃まで、盛んに闘ったものです。

当時は、捕まることは無かったし、直ぐ釈放されました。指導者が捕まっても数日で、直ぐに出てくるのが常識であったのです。

社会党・共産党・国鉄労働者・日教組など、大勢のデモが、国会での論戦とあわせて院外でも、盛んに繰り広げられていました。権力側も、そうした反体制運動の総体の一翼として学生たちへの弾圧にも、無茶は出来なかったのです。今の、デモやビラ配り、落書きへの警備弾圧はひどい警察国家の姿を示しています。

(5)初めての学生大会

(明大駿河台7号館付近の様子)



入学後、65年5月か6月か、明大全学自治会の学苑会の学生大会が開かれることになりました。日共系学苑会執行部の人たちがクラス委員を選んで、大会への参加を呼びかけるようになりました。そうすると、一方、反日共系の方は、この日共系の学苑会は“正統性を失っており、ボイコットすべきだ”と主張し、ビラを撒いていました。

文学部自治会としては、大会をボイコットするようにと、クラスに呼びかけています。両方が、授業の合間に教室に来てはオルグ合戦し、かち遇っては論争して

います。それをみていて、私たち入学して間もない史学科日本史専攻としては、どうするか話し合いました。そして今回は、代議員を大会に出すことはやめて、出来るだけ多くの人が大会にオブザーバーとして参加することにしよう、と決めたのです。そんなわけで、40人ほどのクラスの8割くらいがオブザーバー席に参加して、大会の成り行きを見守ることになりました。

大会が始まり、資格審査委員が参加代議員を読み上げて大会の成立を告げました。ところが、日本史専攻の代議員としてクラスのSさんが座っていました。彼女は、高校時代から民青だと語っていて、学生大会への参加を強く主張していた女性です。この一件を通して、私は日共の友だちに対して批判的になり、反日共系に肩入れしていく出発点となりました。

大会成立を告げる議長に、「異議あり！」と挙手をして、私は発言を求めました。

オブザーバー席に、白い帽子を被り、紺に白の水玉のワンピースの見かけない女の子が手を挙げたので、思わず議長は私を指したのでしょう。当時は、キッコーマン入社スタイルの流行りの出で立ちのままで、大学に通っていました。オブザーバー席から、20メートル以上ある階段教室の600人収容の大会場の前までやっと辿りついてマイクの前に立ちました。

そして、私のクラスでは大会には、代議員を出さずにオブザーバーとして参加すると決めた。そして今日本史のほぼ全員がオブザーバー席にいる。にもかかわらず、Sさんが、1年日本史の代議員となって座っているのは不当であり違法だと訴えました。私の発言の趣旨がわかりはじめてところで、「うるせーこのガキ！」と野次が飛び「トロツキスト！」と罵声が飛んだのには吃驚しました。

「あなたたちは人の話も聞けないのですか？！」とやり返しているうちに、今度は、オブザーバー席にいた反日共系の学生たちが待ってましたとばかり、一挙に壇上に駆け上がりました。そして議長や壇上の日共系の学苑会高橋委員長以下を殴りつけました。その上、「シュプレヒコール！この大会は不当だ！」「デッチあげ大会粉碎！」などと叫びます。スクラムを組んで「ああインターナショナル」とインターを気分よく歌い上げると、スクラムを組んでデモ行進しながら退場してしまいました。

私たち一年生はあつけにとられていました。倒れていた日共系の高橋委員長はマイクをとり「学友の皆さん、見ましたか！これが暴力集団トロツキストの正体です。さあ、民主的な我々のもとの大会を続けましょう」と、呼びかけると、「異議ナシ」の合唱のもとに、学生大会は議事進行し、スムーズに日共系の議案と人事を採択して、終わってしまいました。

何のことはない。大人と子供の勝負みたいなものだったのです。私は日共系の誤魔化しはまったく許せない欺瞞だと思いました。同時に、反日共系の自己満足的なやり方では、学生を結集させられないと思いました。

ちゃんと計画を立てて、日共系から秩序に則って、学苑会を取り戻すことを考えるべきだと思いました。先輩たちにそう言ったのですが、そんなことは無理だと一喝されました。そうかな、でもやってみる価値はある。そんなに難しいことはないと思う。

この一年生の時の、学生大会における日共の誤魔化しが、私を反日共に追いやりました。そして、学苑会を日共系から奪回するために、数年かけてもやってみようと思うようになったわけです。もちろんそれだけを目的にしたわけではなかったけれど、日共からの奪回を日指しはじめました。

頼まれてやり始めた文学部の自治会の執行部はやめて、文研から出向する形で研究部連合会執行部に加わろうと思いました。ここなら、各サークルをオルグして文学部以外とも協力して日共との論争をも全校的に行えるからです。

(6)研連執行部として

研究部連合会、通称「研連」は、もう幾つのサークルがあったのか忘れたが、20位のサークルがあったと思います。各サークルには大学側や自治会費から助成金が出て、研連執行部が予算を管理配分し、研連の活動の自治を保証していました。

反日共系の人たちは、この研連は、民青の牙城だと言ってオルグもしていません。私はそうは思いませんでした。自分の文研サークルも民青が牛耳っているわけではありません。実際、研連の執行部に加わってみると日共系の方は、執行部の半分くらいのものでした。それも「ゴリ民」というより、日共シンパのような人たちだったのです。

研連執行部として、活動にもっとも必要なことはサークル活動の保証とサークル相互の支援を強化することなど、当たり前のテーマで活動していくと、日共も反日共もない、みな友好的な仲間でした。

そんなに、日共系の人が多くないと判ったと同時に、政治研究部や近代経済研究部などには、社会党系とか学内の反日共系とは一線を画して昼間は労働しながら、職場で組合運動や活動している人たちも、多々いるのが分かりました。そして、日共批判の理論的研究をしている仲間がいるのもわかってきました。

そうしているうちに、66年、明大でも早大に続いて学費値上げが語られ始めました。以降、学費値上げの白紙撤回を求めて、学費闘争が始まります。

この学費闘争の始まりは、今から思えば、これまで、60年安保闘争以降、日共系が牛耳っていた学苑会を、私たち研連を中心として、反日共系が学苑会を奪回する学生大会となっていきます。66年秋のことです。

この頃には、もうキッコーマンでの正社員としての仕事と大学の両方がこなせなくなって、2年近く勤めたキッコーマンは、20歳の冬に退職していました。

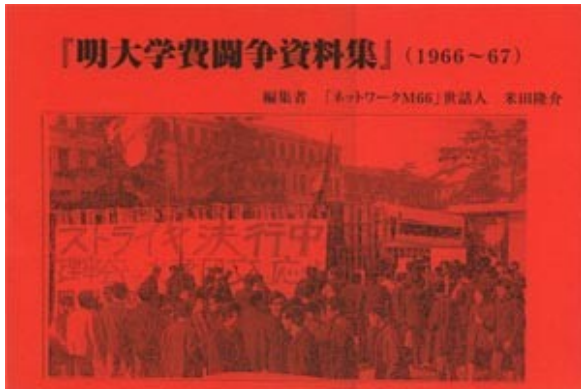
そして、当初は、世田谷の中学の学区域にあった経堂の伯父の家から大学に通っていました。それでも夜10時の授業のあとの研連の活動や文研の会合は最終便にぎりぎりです。0:20分の新宿発の最終で帰ってくる私を、門の外で待っていてくれる子供のいない伯母の優しさが申し訳なく、気づまりになって、そこを出て小さな下宿を借りることにしました。婚約者とは、日本を変えるために、自民党を変革するという彼とラジカルな革命を求める私で、会う度に論争になっていた頃です。

この学費闘争を巡る秋、私は21歳になります。

私の20歳は丁度、大学に65年に入学し、デモや学生大会、雄弁や選挙運動、婚約まで経験しました。「自分の限りない献身や尽力が、社会や人々の力になる！」というとても一方的な「信念」に燃えていた20歳の時代です。

第4章 明治大学学費値上げ反対闘争—1966年～67年—

(1) 当時の環境



1965年秋から66年秋へかけての私は、大学生活やその社会の内容をまだよく知らないままに「希望にみちた学生」として二十歳を謳歌していました。早大には友人がいたり、ネール記念杯の雄弁大会も早大の大隈講堂だったこともあり、早大に行くことが何度もありました。

「早稲田大学は学ぶものすべてに門戸開放で、門がない大学なんだよ」と友人が案内してくれた校内をきよろきよろ見まわすと、明大の数倍の数の大きな

立て看板があちこちにあります。アジテーションやデモありの、騒然とした大学だという印象を受けました。65年当時の早大は、学費値上げ反対闘争の真っ最中だったのです。

「あれが大口議長だよ」と友人に言われてみると、体育会系のような若者が、ハンドマイクでアジっていました。まわりには立っている人も座って聞いている人も、そのまわりを横切る人もいて、バラバラでのびやかな雰囲気だったように記憶しています。でも、後で聞くと、早大は党派間のゲバルトが激しくて、のちに大口議長も暴力の犠牲者の一人となったようです。

学費値上げ反対闘争は、その前に慶応大学でも始まっていたようでしたが、私が知るのは早大闘争からです。学費値上げ反対闘争は、社会的・客観的なさまざまな要素をもって慶応・早稲田から全国へ広がっていきました。

当時の経済成長路線は、アメリカ流の大量生産・大量消費へと向かう上昇過程にありました。生産手段の更新をもって本格的に産業構造の「革新」を始めていました。そして、それに見合った「期待される人間像」や産業にふさわしい教育再編・管理統制を求めた文部省の指示がありました。大学は、戦後の新しい教育を求めて出発しながら、私学は慢性的赤字だったようです。「社会的要請にみあった大学」という名目で国の助成金も、いわゆる「ひもつき」で大学の管理が強化され、「産学共同路線」に向かって進みました。「真理の探求」は二の次で、大量生産大学化と、学費値上げによって経営を立て直そうとする動きと重なります。

学生運動においては、60年安保闘争を闘ったブントは“四分五裂”し、「安保が潰れるか、ブントが潰れるか」といわれた停滞期を脱して、新しい流れが形成されていました。大管法やベトナム戦争に反対する国際的な動き、また日韓条約反対、アジア再侵略を懸念しての日本の戦争責任を問う動きなどです。

こうした新しい流れに乗って、これまで活動してきた反日共系の学生が、都学連からさらに全学連結成へと、学生運動を再統一していく動きの中に、明治の学費闘争がありました。

全学連再建と、明治の学費闘争は不可分な関係にあったのだと、歴史的にとらえ返すことが出来ます。このとき再建された全学連を中心として、今後進むべき道を明大学費闘争の中で問われたといっても過言ではありません。「革命を目指す」党派と「自治を基盤とした学生運動」が相対的別個の運動方向を持ちうるか否かが、明大闘争の中で問われていたのです。言い換えれば、党派

政治に学生運動が収斂されてしまうか否かの分かれ目に、明大学費闘争があったということもできるでしょう。

当時の明治大学は、一部(昼間部)2万5000人、二部(夜間部)1万人の計3万5000人の学生が学んでいました。神田駿河台、生田、和泉と三地域に校舎は離れていましたが、二部は神田駿河台にありました。

私は1年生の秋か2年生のはじめ頃から、二部サークル連合の「研究部連合会」(略称研連)の執行部にいました。この研連に所属するサークルは、幾つあったか思い出せませんが、20ほどあったと思います。働きながら集い、研究したり趣味を深めたりする「研究部」(サークル)です。その連合体の執行部にいたのです。

この研連は各学部自治会同様の自治会の位置にあり、その上に全学自治会として、学苑会中央執行委員会がありました。学苑会は1年に1~2回、6月と11月ころ学生大会を開き、総括と今後の活動、予算、人事案を示し、その信任を問います。各学部と研連の大会はそれぞれが別個に開かれます。全学大会の代議員は各クラス代議員が一票の権利をもつように、サークルも一票の権利をもって参加します。

当時は、文学部と政経学部の自治会執行部が反日共系で、学苑会全体は日共系でした。そのため、全学生大会では、いつも日共系が勝利しています。そこで政経学部と文学部はボイコットしたりしていました。日共系はボイコットに対抗して「政経学部自治会民主化委員会」、「文学部自治会民主化委員会」をつくって、全学大会への参加を呼びかけます。

文学部史学科の私のクラスでは、65年の学生大会では、クラス決議で大会にはオブザーバーとして参加し、様子を見ると決めていました。ところが、クラスの民青のある人が勝手に代議員席に座っており、クラスのほとんどは日共系の「ずる」に怒りました。同時にこれまでも大会がズサンに運営されていたということが分ってきました。私は真面目に活動して学生を味方につけ多数派工作をすれば、日共に負けるはずはないと思ったものです。

研連も「日共系」と目されていました。研連は日共系の学苑会中執を認め、党派的なことに興味もなく、そうした動きをしなかったからです。研連執行部は、各サークルの円滑な運営と助成金や学生会費の総額から、予算折衝を行なって、各サークルに配分すること、大学祭や各サークルの行事の支援などが主な活動です。もちろん二部の学生は、当時の政治状況から、みな政治意識はしっかり持っていたても、党派的なセクト主義的動向には興味を示さないというところでした。

私は1年生の学生大会の経験から、3年くらいかけてきちんと真面目な自治会活動をすれば、学苑会執行部も反日共系が掌握することは可能だろうと思いました。

ただ、政経や文学部自治会では、そういうことを現実計画として考えたり行動したりする学生がいて、自分たちの自治会を民主化しようと介入する日共との争いで精一杯でした。私は日共系のあきれた学生大会を現認して以降、研連から変革を求めれば、必ずどの学部にも声を届けることが出来るので、やってみようと思ったわけです。

大学の雄弁会も一度やってわかったし、学生大会をひっくり返すことに熱中する正義も、やりがいあると思いました。クラスの友人に話すと「君、オールスター戦の野球やゲーム感覚みたいに言うねえ」と驚かれました。でも正義の実現の一つと真剣だったのです。

そこで、自分の所属する文学研究部に、私を研連執行部に派遣するよう推薦してほしいと、言いました。確か、まだ1年生かこれから2年生になるところで、誰もやりたがらない研連の執行部をやるという奇特さは、数十人の部員から、不思議に見られたでしょう。ことに政治意識は十分にあって文学的表現を模索するサークルだったので、幹事長(研究部の長を当時、幹事長と呼んでいた)はびっくりしていました。

数日後、幹事会の話し合いで、本人が主体的にやりたいなら、部として推薦しようということになったと、推薦を決めてくれました。そして、研連大会を経て、65年11月(か66年初め)くらいに、研連の執行部の副事務長に入ったわけです。

その後事務長になりました。各サークルの意見や希望、トラブルを集約し、対処する役割です。研連は、党派的な自治会より健全で、活動の領域が広くありました。教育研は教師になりたい学生の研究機関のようだし、政治研は社会党系の学生の集まりともいえ、マックス・ウェーバー、ルソーから基礎的な学習会をやっていました。近代経済研はケインズ政策を研究していました。社会科学研には日共系のマルクス主義者が多くいました。他に空手部やジャズ、軽音楽、演劇部、文学研、雄弁部、地理研、歴史研、法学研など多岐にわたります。というようなわけで、各研究部には、やる気のある自主的な人びとが集まっています。

みな一様に授業と勤労の合間の貴重な時間を注いで真剣に活動し、各学部を越えてサークル活動に参加しています。それだけに、研連執行部の訴える企画や要請に、多くが参加します。日共学苑会執行部もとても友好的でした。

研連に入ってわかったのですが、反日共系から「日共の牙城」とか「民青のいいなりの研連」と聞いていたのですが、そんなこともありませんでした。

研連執行部も、社会科学研究部と民主主義科学研究部など日共の牙城といわれるサークルから研連執行部に來ていた人は民青のしっかりした人でしたが、それ以外はそうではなかつたのです。反日共系の人びとのやりかたの幼稚さで、結局「敵」としてしまっただけでした。それに、研究部の中には、職場で社会党系や協会派系の組合運動をやっている人も多く、「日共系執行部」の学苑会には別段かかわらないという学生もいました。

掘り起こせば、いろんな人がいました。夜学研も夜間大学の向上を都レベル、全国レベルで、どう行なっていくかなど研究している、真面目な良識派の人びとが多くいました。執行部に加わった新米の私は、夜学研や政治研、雄弁会やジャズ、軽音楽研などの仲間と、夜間大学での研究活動の条件の拡充(予算・場の確保・昼間部との調整)などに楽しみながら、尽力しました。

66年には新築になった学生会館が開館しました。3階には学苑会(二部)、学生会(一部)、文化部連合会(文連一部)、研連の各執行部室が割り当てられました。日共系の学苑会、ブント系の学生会も文連も、3階に一緒です。研連は文連と連携しやすいこともあり、大学祭(駿台祭)の準備が盛大に行なわれました。

この年はまた、大学が創立85周年(明治法律学校)の記念行事を大規模に企画していました。一方で、学費値上げの話が出てきました。

65年から学生部長の任にあたられた宮崎繁樹先生の「雲乱れ飛ぶ」などを資料に参照にしながら、当時は知り得なかつた事情なども含めて現在から捉え返してみたいと思います。

この著作「雲乱れ飛ぶ」は2003年10月21日に発行されました。私家版限定200部です。余談ですが、この本に先立って明大の当時の学生自治会(一部)の米田隆介、大内義男、斎藤克彦氏らが明大学費闘争の記録を残そうと、宮崎先生を含めてその作業に入りました。2003年4月26日には、当時の明大記念館のあとに建てられたリバティータワーの演習室で、明大学費闘争のシンポジウムも開催されて、活発な討議が行なわれたそうです。

しかし、執筆の過程で、斎藤克彦氏らと宮崎先生との見解が相入れず、また原稿が集まらず、本とはならなかったようです。そこで、宮崎先生は当時の学生部長としての立場から、「雲乱れ飛ぶ 明大学園紛争」を執筆、自家出版され、米田隆介さんが「明治大学費闘争資料集」としてまとめました。米田さんの労作には、学生側の生の資料と学費闘争に参加した人びとの経験談が載っています。私も獄中から参加して一文を寄せています。それらを参考にしながら当時を現時点で、俯瞰的にとらえながら明大学費闘争をふりかえってみます。

(2)1966年 学費値上げの情報

(明大記念館・72年入学案内より)

明大の理事会は、財政状況の悪化にもかかわらず、長年なんらの対策をたてずにきました。学費値上げも考えても実行せず、財政悪化は慢性化していたようです。

理事長は第3代日本弁護士連合会会長、日本国際法律学連絡協会会長の弁護士・長野国助。総長は武田孟、学長は小出廉治で、比較的民主的な考えを持つ方でした。小出学長は、自ら60年安保当時、学生に国会へのデモを呼びかけて、大学をロックアウトし、紫



紺の校旗を掲げたデモの先頭に立った人として知られていました。

宮崎先生の著書によると、65年の教職員の新年会で、武田総長は学費値上げを考慮せざるをえない時機にきていると言明されたそうです。「1965年の5月24日に昭和41年からの値上げ方針を理事会で決定したが、早大紛争におじけづいたのか、11月20日になって『値上げ断念』を表明したのだった。

その為、昭和42年度は、どうしても、値上げせざるをえない状況に、大学側は追いつめられていたのであった」(『雲乱れ飛ぶ 明治大学園紛争』宮崎繁樹著)と記されています。

65年に学生部長に就任した宮崎先生は、小出学長に、「授業料値上げ問題について」という文章を提出したと記しています。その文章で、早大の反対闘争を教訓として、対処を諮る必要がある点を述べています。真の大学をめざすために、現状より研究者の不足による学問の危機、負債にあえぐ財政の危機、政治的に中立たりえない大学の自治の危機、この3つの危機を解決するために一丸となるべきと宮崎新学生部長は訴えています。また、学費値上げのときを迎える学生部長として、66年には「護民官として」と立場を表明しています。

「ローマにおいて政府から任命されつつも、民衆のために尽力した『護民官』のように学生部長は職制上大学の機関ではあるが、学生を真に守る『護民官』として行動しよう」と心に誓ったのだった」(同)と当時の心境をのべています。

学生の側は、66年の4月以降、新年度からの学費値上げが噂されており、一部学生会中執、二部学苑会中執とも、理事会に対して学費値上げをどう考えているのか、の打診を行なうようになりました。「6月17日に学苑会(夜間部学生自治会)から、18日に学生会(昼間部学生自治会)から、それぞれ、学費値上げ経理内容公開を求め大学理事会に『団交』の申入れがあった。同月24日に、大学側と学生側との第1回話し合いが持たれた。それはその10日ほど前、学外の『駿台荘』で理事会が開かれたらしいとの噂を学生側がキャッチしたからだった」(同)と、書かれています。当時の和泉校舎の学生会のビラには、以下のようにかかれています。「学費値上げ決定か。六・二二大衆団交を勝ちとろう。理事会は学生と話し合いを！ 全和泉の学友諸君！ 去る15日、理事会は一方的に学生の前に授業料値上げの決定を提出してきた。この授業料問題は、諸君が、充分承知のように、現在の日本の大学の最大の矛盾としてあり、その典型的なものとして、早大闘争があることは、理事会のみならず、学校関係者は、充分知っているはずである。そして、現在の明治大学においては、その矛盾を解決しようとする姿勢すら学校側には、見えず、ただ単に、他大学より遅れて値上げするのだから云々という形で、この授業料値上げの本質を隠蔽し、現在の段階においても、完全に学生を無視している。(中略)我々は授業料値上げには、絶対反対であり、反対しなければならない。なぜなら、この学費値上げが、大学のあらゆる矛盾の集中的な表現であり、具体的には、マスプロ教育の、あるいは、産学協同路線の方向の追及の発端であることは、明確であり、我々学生を商品として、単なる物として、機械的人間として、位置づけようとするものなのである。学友諸君！ 真の大学とは何なのだろうか。それは、理事者達によって作られるものであろうか。もはや、我々自身の手でしか大学の矛盾は解決できない時期にきているのだ！ 学生会中執、法、商、政経、経営、文、各学部、学生会」(「明治大学費闘争資料集」より) こうしたビラが、和泉校舎でも、神田駿河台校舎でも撒かれ始めました。

社会主義学生同盟明治大学支部が発行した『コミニズム』号外 1966年6月23日号には「学費値上げは阻止せよ！ 阻止闘争の巨大な前進に向けて、歴史的な闘いの先頭に立とう！」と、訴えています。

その中で早大闘争の総括的視点として(I)早大闘争は、遂に大浜から、阿部に理事会指導部が交代したのを契機に終息過程に入り23日、全学授業再開によって、現象的には、事実上終わろうとしたと言える。(中略)闘争は、陣地織と街頭織との有機的結合も、決して民族主義的になしえないし、なしではならない。個別資本(ないしは理事会)と、国家権力の一体化に対抗する我々の力量は、総学生の、それではなければならない。早大闘争の敗北的事態にいたった原因の一つは、全学共の民族主義的対応によるところが極めて大きい。もちろんこの場合、学生の意識及び、情勢の推移を考慮しない訳にはいかないが、問題は、いかに総学生の運動へと、意識的に指導するかであり、かかる指導の放棄に結果する敗北の原因こそ徹底的に暴露されなければならないのだ。(II)民青批判。早大闘争において「穏健派」と呼ばれブルジョアジーから事態收拾のもっとも頼りになる部隊として期待されたのが、民青である。かれらは個別資本(ないしは理事会)との闘いを回避し、反米・諸要求貫徹に闘争を解消し、党派的闘争に学内闘争を従属化し、埋没させ、闘いを意識的に分断した。また彼らは、戦術的方針として、圧倒的大衆から、支援されたストライキに対して、学内の秩序を破壊すると称して公然と反対し、利敵行為を行なったのである(中略)明

大においても、早大民青の、あの犯罪的な役割を、明大民青は、再び演じようとしているのだ。彼らを闘いの戦列から追放せよ！」(同資料)と主張しました。

この時代は、全共闘運動のような、少数派による占拠、自主管理、異議申し立ての時代ではありません。

今から思うと、実に貴重なことなのですが、第一に「総学生」を対象として、徹底して民主主義のルールにのっとり学生自治会を運営していました。民主的な多数派工作がとても重要でした。抗議にも秩序がありました。第二に、早大闘争の敗北をまのあたりにした時代にあったことです。右翼による暴力、民青によるストライキの解除、国家警察権力の当局との一体となった自治への介入などなど、「次は明治だ！」と、ひしひしとした思いがありました。第三に日共民青との闘いです。当時の学生運動は、共産党の分裂(58年の共産主義者同盟の分裂のみならず国際派との分裂に続いて、中国派とも当時日共は党内闘争がはじまっていた)を反映していました。そのために、路線的にも日共系と反日共系では鋭く対立していました。日共の反米闘争に収斂していくあり方に対して、反日共は反独占の日本資本主義との闘争を中心にとらえるべきという考えに基づいて、日共の要求闘争(国庫補助や諸要求)を闘争の回避と批判しました。また国庫補助運動を教授会と共同して政府、文部省に行なうべき、という方針にも反対していました。もっと根本的な、日本資本主義の帝国主義的再編にともなう学校教育行政、そのものを問う中で、学費値上げ阻止闘争を位置づけて闘うべきだという違いがありました。

当時、一部は反日共系のブント・社学同が学生会中執を握っており、二部学苑会高橋中執は日共民青系が握っていました。そのため、両者の足並はそろっていませんでした。

二部政経学部執行部はML派や中核派系やノンポリ、文学部はML派系とノンポリの反日共、研連執行部には日共系もノンポリなどもありました。研連は法、商学部同様、日共系学苑会を正規の中執と、認めていたのです。

(3)1966年「7・2協定」



(明大駿河台校舎9号館前中庭:72年入学案内より)

学費闘争が具体的になりつつある6月ころから、徐々に上記のような一部と二部の執行部の路線の対立も顕著になっていきます。

6月29日付の文学部学生委員総会の討論資料「レジュメ」には、次のように記されています。「学費値上げ何故反対するのか? 経

営者の言う「私学の危機」とは何か? 私学の会計は、御存知のように経常部と臨時部に分かれています。経常部(給料・研究費・図書費…等々)臨時部(建築費・借入金返済…等々)、いわば経常部は、我々学生・教職員に還元される部分であり、臨時部は、建築費など学園建設計画のための設備投資に使われる。現在「赤字」といわれるのは、この臨時部の予算であり、この設備投資は、我々学生・教授等、いや、大学教育を考慮に入れた計画ではなく、単に学生定員をふやす(もうける)ためであり、この設備投資で建てられた建物は、彼ら経営者の財産になるのだ。これで、生じた赤字を学生におおいかぶせるのが、理事会だ。・私学は、いかなる方向にあるのか。私たちが、

この春以来闘った「大学設置基準」改悪、そして「教免法」改悪の闘いが、いかに学費値上げと関連しているのか。現時点において何をなすべきか。この間は、私たちは、理事会に団交を申し込んできたが、理事会の、『決定していない段階において、学生と話し合いの必要を認めない』という不誠実な態度によって、団交は拒否されつづけている。私達は、このような理事会の態度を弾劾すべく、6月30日の、常勤理事会、7月4日のオール理事会で、学費値上げ決定阻止の闘いを組むことが、今、必要だと考える。一方、クラスにおいて、「学費値上」反対のクラス討論をより徹底させよう。」(同資料)

こうした流れの中で、学生と学長の間で、夏休み前に確約書が交わされました。これは「7.2協定」と呼ばれ、明大の学費闘争の出発点となりました。「確約書 本年6月24日と、7月2日の2回にわたり大学当局と学生会は、昭和42年度の学費問題について話合ったが、本7月2日に至りこの問題について次の確約をみた。

確約一、昭和41年9月以降大学当局と、学生会の両者は、昭和42年度の学費問題について話合う。尚、この話し合いの前提として、昭和42年度の学費値上げについては、値上げするという基本方針決定以前に話し合い、事情によっては、昭和42年度の学費は、値上げされない場合もある。昭和41年7月2日(法人理事会を代表として明治大学学長小出康二、明治大学学生会中央執行委員会委員長中沢満正)」

ところが、7月7日付の明治大学新聞には、法人理事会は6月13日に駿台荘で、「かねて法人企画室でまとめていた資料をもとに学費改訂の具体的対策に着手。

翌14日第一会議室で、教員出身常勤理事を中心に、学内、特に学生に大きな影響を持つ教員対策を協議、翌15日、学部長会議に全役員が出席して、学費改訂を伏線として、法人の経営・財政実情の資料を配布した」という記事が掲載されました。このことは、学生に対して確約した内容と違っており、大学当局が、二枚舌をつかっていることを暴露しました。

学生側は抗議し、不信をもちました。7月24日、理事会は教職員に「本学財政の現状について」という小冊子を配布したのだそうです。

宮崎学生部長は当時を次のように述べています。「現在明治大学の経常部予算収支は、赤字である。昭和41年度授業料収入は約15億9200万円で、収入総額の62.4%をしめ、その他の入学金2億8500万円、試験料3億1800万円、その他の収入、1億7000万円を加えても23億6500万円にしかならず、25億5000万円にのぼる必要経費をまかなうことは出来ない。支出の76.4%は、人件費、19億6500万円、研究・教育経費は11.6%の2億9500万円、その他一般経費は、11.5%の2億9300万円というのであった。明言はしていないものの、常識的には、学費値上げが必要であることを窺わせた。建築等にかかわる臨時部予算においても、借入金が入収入の40.6%にあたる4億2800万円、学費が19%の2億という危機的状況であった。学生が負担する授業料、入学金、施設費の総額を昭和41年度の他大学と比較してみると、

文科系について、慶応義塾大学49万円、早稲田大学42万円、立教大学45万円、同志社大学39万円に対して、明治大学は27万円であった。理科系についても慶応義塾大学69万5千円、早稲田大学68万6千円から71万円、立教大学61万円から67万円、同志社大学55万円に対して明治大学は40万4千円から41万2千円であった。(「雲乱れ飛ぶ」より)

(明大駿河台校舎空撮：72年入学案内より)

(4)学費値上げ反対闘争にむけた準備

こうして、一部も、二部も、夏休み明けには、学費闘争を必然と考えた体制づくりに入りました。私たち研連は、8月、明治大学信濃寮での研連合宿を行ないました。その中で、学費値上げ問題を問う分科会を特別にもって、討論を行なうこととしました。日共系・反日共系の論争の場を提供しながら、次の闘いに向けた準備にかかりました。

当時、政治研究部の顧問は田口富久治教授であったので、彼にも、合宿の参加をお願いしました。二部の学生たちが時間をとれる時期は限られており、合宿は貴重です。その中で、教育研を中心とした教育問題やベトナム反戦闘争、中国の評価、大学の自治などいろいろのシンポジウムを組みましたが、メインは学費闘争関連でした。

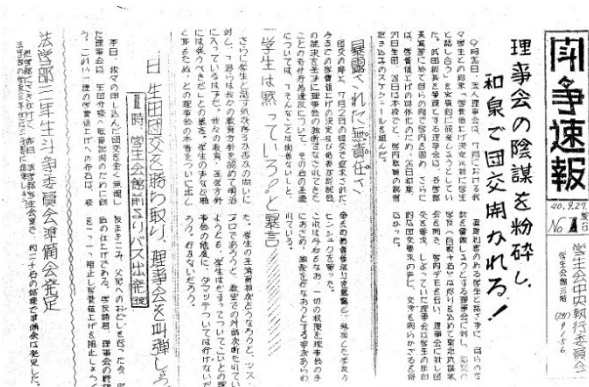
この合宿での論戦をふまえて、研連としての学費闘争に対する方針を固めることになっていたもので、私は政経学部や文学部の中核派の人やML派にも参加を求めました。日共系は社研を中心に準備して来ていました。彼らは、反米独立闘争に基づいて国会で、日共の多数派形成のための選挙支持を拡大する日共の当時の路線に沿って、国庫補助要求をすることを主張しました。そして、ストライキは全学投票にかけるべきだ、と主張していました。

反日共系の側は、日帝は既に復活しており、独占資本が自己の利益のために日米安保を求めて、海外進出を進めており、こうした帝国主義的再編の教育行政の中に値上げ問題があると主張していました。そして、総学生との連携第一で、昼間部とも共通した闘いを組むことを主張し論争になっていました。

両者が白熱してやりあっていたときに、田口教授が反日共系の学生に向って、「それじゃあ君らは、大学で革命をやろうといってるんだね?! ハッハッハ!」と、大笑いをしたので、みな一瞬沈黙しました。なぜなら、政研では、田口先生は日共の御用学者じゃないからと参加してもらったのに、この発言で社研の民青が勢いづいてしまったからです。

今から考えると当然の、田口教授の指摘なのですが、反日共系の学生は「なんだ、田口は。日共と同じじゃないか…」などと憤慨していました。こんな討議を経て、夏休みを終えたのです。

研連執行部はこの合宿で、反日共系的な考え、ことに一部と二部のストライキ方針が連ったら、二部がストライキを排除するような方針を採るべきではないという考えを固めていきました。また全学投票は無責任であるから、これまで通りの学生大会による決定を求めることにしました。



夏休みあけの9月から、全学、学費値上反対闘争の情宜活動を広げ、活発な討議が行なわれていました。一方で、全学連再建準備結成大会が進みました。学生部長の宮崎教授の「雲乱れ飛ぶ」を参考にしながら、全学連再建準備大会の状況を要約すると、以下のようなものだったようです。9月に入って学生会中執委員長から10月8日、9日の両日、神田記念館講堂において、全国自治会代表者会議(全学連再建準備会結成大会)を

開催したいとの願い出をうけて、宮崎学生部長は、記念館の使用を許可しました。

ところが、9月22日に清水谷公園においてベトナム反戦集会(全学連第一次全国統一行動)が開催された際に、全学連再建派とそれに反対する革マル派との間で大乱闘が起こり、多数の負傷者を出し、早大でも乱闘内ゲバが起こったので、当然、明大記念館での混乱も予想されました。そこで、学生部長は、学生側から混乱を起こさない旨の確約書を取り、学生部総動員で警戒にあたります。



第一日目は、午前6時から26大学、56自治(会)が、この大会に参加。正門付近に社学同系学生、2号館前に社青同系学生、通用門付近に中核派学生300人くらいが座り込み、棍棒を旗に包んで数箇所におき、ヘルメット着用もみられたとのこと。

7時半ごろに早稲田大学から革マル派学生150人ほどが出発したとの情報が入ると、棍棒を持ち出し、小石や瓦を集めて闘う体制に。

学生部長としては8時半に授業が始まるので、

正門を開くことを通告。その間にも早大、中大から革マルの動きが伝えられる。15時に学校側の警備の間をぬって、革マル派学生200人が構内に入りこんで、全学連再建大会中の記念館前で、ジグザグデモを行なった。学校側は、記念館内の学生に手を出さぬよう呼びかけ、革マル派学生には構内から退去を求めて、学生部長以下身体を張って、機動隊は大学に入れぬよう監視していたようです。

革マル派系学生は、40分ほどのデモンストレーションをして、機動隊に囲まれながら早稲田に戻ったとのこと。2日目の10月9日も午前5時半から、主催者側の全学連再建派の学生が何百人も集まり、各々ジグザグデモを行なって、氣勢をあげながたが、2日目は襲撃もなかったらしい。私は明治の学生とともに、この光景を見学していました。(もしかして、以下の私の記憶は、一日だけあったやはり明大記念館の12月18日の、全学連再建大会本大会の記憶とごちゃごちゃになって混同しているかもしれません。

12月再建本大会は、記録では、35大学・178自治会参加です。)壇上には事前の党派間の話し合いで決まった議長団がおり、自派の演説がはじまると、ワットと、拍手して「異議なし！」と騒ぎ、他党派の演説を野次ったりしていました。自治会単位の全学連再建大会のはずが、党派集会の競合そのものでした。乱闘になると後方に陣取ったML派の畠山さんが群を抜いたすばやさで、群がる人の肩などを踏み越えて、小競り合いを制していました。

記念館には1000人弱が集まっていました。自治会数はブント系が一番多かったのですが、動員数では中核派が最大勢力でした。

こうして、自治会数を多く押さえて、全学連再建の主導権を握ったブントと、革マル派との党派闘争から全学連再建に積極的に役割を果たした中核派を中心に、競合した関係のまま全学連の再建が方針化されました。解放派をふくめて三派全学連と呼ばれますが、ML派、第四インター、青年インターなど自治会を掌握していない党派も加わっていました。

前年の日韓闘争国会デモでもリーダーシップを発揮していた斎藤さんは、都学連の委員長として、後にこの全学連の委員長として活躍しています。

彼と明大社会学同は、全国に範を示すような闘争として、明大学費値上反対闘争に立ち向かおうとしていたと思います。明大のためのみならず明大学費闘争は全学連を社会的に認知させるため、ひいてはブントのための闘いでもあったでしょう。9月に共産同統一委員会とマル戦派が合同して、第二次ブントを結成して初めての大きな活動が、この全学連再建準備会結成大会でした。こうした背景を背負って明大学費闘争が始まります。

第5章 明治大学学費値上げ反対闘争—1966年～67年

(1)スト権確立 バリケード—I部(昼間部)の闘い—

夏休みが明けて態勢を立て直した学生側からの9月27日団交申し入れを大学の理事会は拒否しました。

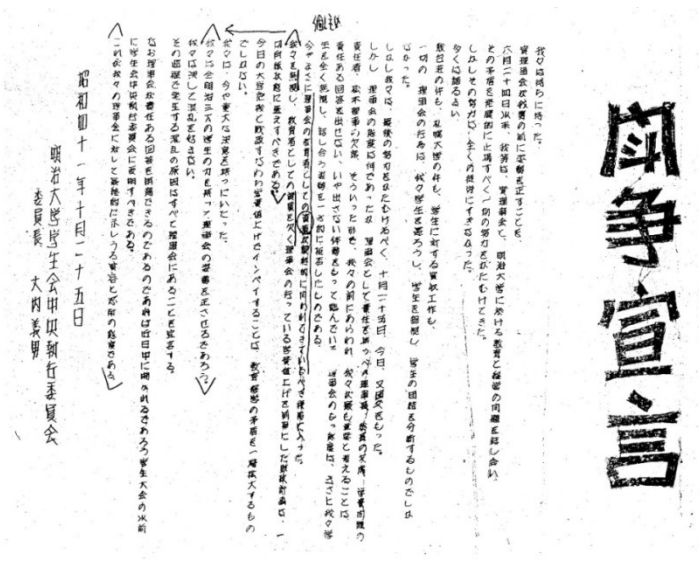
理事会側は教授会や職員組合と学費問題についての懇談を始めながら、学生側を無視したのです。学生側の繰り返しの抗議要請、公開質問状への回答などを経て、ようやく9月30日に理事会、教職員、学生の三者による話し合いを、10月12日に行なうと約束。

そしてやっと10月25日になって初めての団交が実現しました。学生側は、この団交で値上げをす

るか否かの回答を求めましたが、理事会側は、緊急理事会を開いて結論を出すとして、結論を先送りしました。

そして、理事会側は学生大会前に回答するという一方で、全学生に「学生諸君へ—本学財政の現状について」という冊子を郵送し値上げの必要性を訴えました。

「28日には、学生会、学苑会に『本学財政(經常部)検討案』を交付した。同日、連合教授会が開かれ、理事の入場を断って学費問題を討議した。25日の話し合いのあと、学生会は理事会に対して、



次の『闘争宣言』を出した」(『雲乱れ飛ぶ』より)。

「我々は決して混乱を好まない。その過程で発生する混乱の原因は、すべて理事会にあることを宣言する。なお理事会が責任ある回答を用意できるのであれば、近日中に開かれるであろう学生大会の以前に、学生会中央執行委員会に表明すべきである。これが我々の理事会に対して、最終的に示しうる寛容と忍耐の態度である」と同日付で締めくくっています。闘争宣言は、学生会中執委員長大内義男名で、教育者としての資質を欠いた理事会の対応に抗議する内容でした。学生大会をひかえて、学生会は、11月に入って、17日までに学費値上げをするか否か、回答するようにと理事会側に申し入、17日には、19日に大衆団交を行なうよう求めました。学生大会が差し迫っていたためです。

17日、理事会側は「学費改訂問題については、教職員、学生の意見を聞き検討した上で決定したいと考え、引き続き検討中なので、19日までには決定できない。大衆団交でなく、学生側中執と24日に、Ⅱ部学苑会とは21日に話合いたい」と伝えたようです。

11月18日に、学生会は全明治臨時学生大会を開催し、賛成271、反対138、保留36、棄権10で

「スト権」を確立。そして、19日の大衆団交を求めます。

こうして、11月22日和泉校舎では、バリケードを築いて学生側が占拠する事態となりました。大学側は24日、和泉校舎における授業休講の措置をとりました。

バリケードストライキは、和泉から神田や生田校舎へと拡がる勢いです。学生会は、クラス討議を経て学生の最高意志決定機関である学生大会でスト権を確立。この民主的な学生大会決議の力をバックに、「理事会側の学費値上げをするのか否か。

臨時学生大会 招請状

全明治臨時学生大会招請状
全明治臨時学生大会は、11月18日（日）午後一時より、和泉校舎第一講堂において開催される。この大会は、学費改訂問題の最終的決定を目的として、全明治の学生、教職員、教務部、学苑会等から招請される。大会の議題は、学費改訂問題、スト権の確立、大衆団交の推進等である。大会の開催場所は、和泉校舎第一講堂である。大会の開催時間は、11月18日（日）午後一時よりである。大会の開催場所は、和泉校舎第一講堂である。大会の開催時間は、11月18日（日）午後一時よりである。

- 一、日時、十一月十八日（日）午後一時より
- 一、場所、本校九一講堂
- 一、議題、学費改訂問題を中心とする

昭和四十一年十一月十八日
全明治臨時学生大会実行委員会
委員長 大内 義典

するなら白紙撤回を」と訴えました。理事会は26日になって11月30日に神田の記念館で大衆団交を行なう旨を、ようやく回答しています。

宮崎学生部長は次のように記しています。「この頃のことだと思われる。（注：11月のスト権確立後）学生部長室で執務していたところに『学長が呼びです』と連絡があった。何だろうと、階段を上がって、学長室に行ってみると、すでに松尾・高岡両教務部長も来て学長と話しておられた。座ると、学長が『どうだろうねえ、こういう状況になっては、学費値上げは、もう、取りやめるよりしようがないんじゃないだろうか』と話始められた。後で思うと、両教務部長も同意見だったのだろう。

しかし彼（宮崎先生自身のこと。この本では、自分を「彼」と表記）は、即時に答えた。『とんでもありません。学費は当然、どうしても改定すべきです。それが学生のためなのですから。学長は明治大学の現状を、これでいいとお考えですか。大学を良くするためには、是非、資金が必要なのです。本番はこれからです。いまからそんな腰砕けでは困ります』と。

学長は困ったような顔をされたが、二の句が継げられず黙られた。両教務部長も、彼の剣幕に辟易されたのか、その会は打ち切りになった。もしその時、彼が同意していたら、間違いなく、昭和42年度の学費値上げは、不発に終わっていたことだろう。」

宮崎学生部長は、終戦時19歳の近衛兵小隊長の陸軍少尉であった経歴を持つ、正義と使命の信念の人。思い込んだら命がけのタイプで、教職員・学生からは、一旦引き受けたら、どんなに泥をかぶってもやってくれる頼りになる学生部長といわれ、「チビッコギャング」というニックネームで呼ばれていました。

当時は当局の盾のように私たちに対峙してがんばっていました。弁護士でもあり、のちに明大総長を歴任し、正義の感をもって私の公判や陳述書も支持してくださっていました。（追記：宮崎繁樹先生は、2016年4月12日、90歳で癌のため逝去されました。その間、獄中にある私に文通で励まして下さいました。

去年のお便りに、こんなエピソードがありました。学費闘争時、明大中執委員長だった大内義男さんが、1967年「2・2協定」以来、突然電話で連絡して来たとのこと。大内さんは癌の末期の病状にあり、「2・2協定」にむけて話合った宮崎先生と当時のことを話したかったようでした。電話で「あれで良かったと思います。それを確かめておきたい」と語られたそうです。あの当時の学費闘争は何人もの人に人生の大きな節目となっていたのを実感します。私も又、その1人です。宮崎先生のこれまでの温かい支援に感謝し、哀悼を捧げます。

なるほど……当時、宮崎先生が理事会や学長よりも腹をくくって、学費値上げを断固やるぞ！と、考えていたのか……と、『雲乱れ飛ぶ』で知ったわけです。もっと、徹底的に話合うべきでした。でも、きっと激しく対立したでしょうけれど。

11月30日、神田の記念館で午後4時から大衆団交が行なわれました。これはI部学生会の要求で実現したものです。司会は、宮崎学生部長と学生1人の2名。

「明治大学を早稲田、慶応に比肩しさらにより優れた大学らしい大学にしていくために是非この学費改訂が必要であり、そのように大学をよりよくすることこそ現在および将来の明治大学生のためになるのだということを理解してもらおう好機として活用しようという熱意にも覇気にも欠いていた…。理事たちは高齢の為か(後にマイクの関係で学生たちの発言がよく聞きとれなかったとの話だったが)学生たちの質問にトンチンカンの答えを連発し、弁解的な答弁が多く、いかにも理事たちが後めたい行動をしているような印象を聴衆に抱かせるような雰囲気だった」と学生部長が述べているように、悪い理事たちと正義の学生の印象は、週刊誌でも揶揄されるほどでした。

何も答えない理事会に、団交を終えると数千の学生たちは、ストライキ決行を宣言し、夜の正門を手始めに机、イスを積み上げてバリケードを組みはじめました。

立て看に黒々と「ストライキ突入」と書きました。この時の宮崎学生部長の早業は伝説的に伝えられました。ちょうど私も、正門のところに居合わせました。学生部長は突然、バリケードによじのぼると、詩吟朗々の「春望の詩」と「国破れて山河あり～」と始めたではありませんか。バリケードを積み上げ中、立て看作成中の何百という学生がびっくりして、宮崎学生部長を見つめました。吟じ終わると「学生諸君、風邪をひかないように」と声をかけて、バリケードを飛びおりました。拍手と「ナンセンス」の声、あちこちから上がり、深夜の正門を沸かせました。私たちも、やるなあ～と見上げていました。

この時の心境を宮崎先生は、「校舎の見回りを終え、引きあげようと正門の内側までくると、学生たちが黙々と机や椅子を積み上げてバリケードを作っていた。平素、最近の学生たちは元気が無いと思っていたのに、他人から命令を受けたのでもなく、一文の個人的利益にもならないのに、黙々と働いている学生が頼もしく思われた」。

そこで、誰に聞かせるものでもなく、突然バリケードに駆けあがって詩を吟じたということでした。まことに宮崎先生らしい姿です。何カ月か前の全寮連大会で、民青が、反日共系を非難して、激しく衝突しそうになった時にも、すっ飛んで来て、「民主主義を守れ！乱闘はいかん。諸君、棒はやめなさい、素手でやりなさい！」とハンドマイクで、身を挺して介入していたのを思い出します。

この日、11月30日のスト・バリケード封鎖はまた、記念館からすぐ近くの91番教室で、学生大会を開いていた私たちII部学生にも、弾みをつけました。

(2) II部(夜間部)秋の闘いへ



II部の学生大会は昼間部も注目していました。

I部には都学連委員長であり、再建全学連委員長となる斎藤克彦さんがいます。

斎藤克彦さんは社学同で、すでに全都・全国レベルの活動をしていました。

彼と、彼より人望のある中沢さんの指導下の社学同の拠点である明大I部は当時の学生運動の注目の的でした。早大に続いて闘いが始まる！早大闘争は、三派全学連の社青同解放派の大口昭彦議長のもとにあ

りました。

再建された第二次ブントとしては、全学連の最大自治会数を数え、全国の範となるような闘いを明大闘争に期待していました。早大闘争の教訓をもって闘う！そんな雰囲気でした。明大バリケード封鎖は、スト権確立の上で敢行された全学自治会の意志のシンボルとしてありました。

この時期の学生大会は、民主主義と、その手続きによることは学生運動のルールでした。やがて、一学園レベルを超えた連携の中で闘うようになってくると、「ポツダム自治会」などと批判が起こり、そのルールを否定し、直接民主主義、少数派による正規の手続きなしの占拠闘争が全共闘運動の波に乗って全国化していきます。

その象徴が東大闘争であったと思います。それより前に始まった当時の明治の学園闘争は、日共、体育会系も一緒に全学意思を問い合い、共同の場で討議し、よりぎりぎりのところで妥結しながら自治会を運営していました。

学苑会高橋中執は、日本共産党に沿った、全国的な学費闘争方針を打ち出していました。日本の文部行政の行き詰まりを、国民に転化しているという日本政府の教育政策批判、そして、学費闘争の解決を、国庫補助の増額によって国が解決すべきと訴え、そのためには、学生・教授会大学当局と一体になって自民党政府と闘うこと、国会内の進歩勢力を拡大し、民主的に政権交代を求めるというものです。

したがって、バリケード封鎖には反対です。共に闘うべき教授や当局教職員を敵にまわし問題の解決を遅らせるだけと訴えていました。ストを行うかどうかは、全学投票によって、全学生の意思を確認すべきだ、という主張です。

夏の合宿を経て日共系の学苑会高橋中執は、ビラ撒き、教室入り、連日のオルグ活動を始めました。今から思うと、日本共産党は社会ルールに則った民主主義路線を提起しています。もし、日共が学生を敵視したトロツキスト批判やソ連派を除名非難(65年日韓闘争の集会場の日比谷公園で志賀、神山ら非難ばかりしていた)や、66年に始まった中国派批判の「自分たちが正しい」とばかり言いつのらなかつたら、もっと学生たちも、日共に共感をもったかも知れません。

ところが、日共の方針を批判すると、「トロツキスト！」として、画一的な批判を返すので、私たちは反発していました。「トロツキストって何？ トロツキーを読んだことあるのか！」と、よく小競り合いを繰り返していました。日共に寛容さがあつたら、もっと違った展開となつたでしょう。

私たち研連も、夏休み合宿を経て、これまで日共の方針の枠内で研連活動を行っていたものを、転換せざるをえないと考えるようになりました。研連執行部は、全学的な学費闘争に備えようと、合宿には学苑会執行部の日共系も、また、反日共系の文学部と政経学部の執行部も招待して、学費闘争分科会で徹底討議をしていました。

その結果、研連の執行部の中に変化が起こりつつありました。それまで「暴力破壊集団でありトロツキスト」としか見ていなかった反日共系の学生と会議でまともに話し合ったからです。これまでは、そう思われて当然でした。

反日共系の少数派は学苑会の全学大会をボイコットし、大会が始まると十数人が徒党を組んで押し掛けてきます。そして壇上の執行部を殴って、一発食らわせたうえで、「ああインターナショナル～」とスクラムを組んで歌い上げ、再びデモを組んで退場していくのを見てきたからです。そんな「破壊主義者」が実は党派的对立の結果でもあると、研連の人々もわかってきました。

明大信濃寮の合宿で草原を走ったり、一緒にワラビを摘んだり、夜遅くまで歌ったり、お互いに触れあったのはよかったです。同時に、「あいつら民青だ」と、話し合おうとしなかった文学部や政経学部の執行部の連中も、みんな日共ではないのか……と、対立一辺倒のやり方を変えはじめていました。その意味で研連の学費闘争を問う合宿は「秋の決戦」に向けた交流と新しい変化をもたらしたことになります。

(3) 学生大会にむけて対案準備

研連執行部としては、大学当局のあり方は国庫補助で解決できるものではないこと、財政の公開、学費値上げの根拠もはっきり示されておらず、当局に徹底して問う必要があると考えました。

それに、日本の教育行政の変革には、日共への1票の投票に解消する党派利己主義にも反対です。また、当局との闘いを回避しての闘いはありえず、学費値上げ反対を実現するためには、スト権を確立し大学当局と徹底して闘わざるをえないと考えました。

I 部には全学連の執行部の命運もかかっており、バリケードストライキに突入するだろう、そんな時にわれわれⅡ部が、「全学投票を！」などと言っている場合ではない、全学投票は物理的にも時間的にもできない。その全学投票の結果が出るまでⅡ部が授業を続ければI部のバリケードを私たちが解除する役割を負うことになるのではないかと、日共の反米日本独立の民主主義革命路線も気に入らない、などと話し合い、対案を出そう、出さざるをえないと話し合いました。

もし、研連が対案を出せばひっくり返るでしょう。なぜなら傘下のサークルには、どの学部の人もいるので、研連から直接、各サークルの知人友人たちに「自分のクラスの代議員になって、研連の出す対案を支持してくれ」と訴えたら、相当の数の代議員支持が可能になるからです。

また、いつもボイコット戦術に明け暮れているML系の文学部自治会と中核派の何人かがいる政経学部自治会執行部にも伝えて、「今回は、研連が対案を出すので、ボイコットせずに反日共系でまとまって、スト権確立のための統一行動を起こそう」と話をまとめました。同時に、I部の学生会中執と、研連のカウンターパートナーの文連執行部とも話し合いをしながら、研連執行部が中心になって対案準備をしていきました。

65年にはまだなかった学生会館が、この時には開館しており、三階には学生会中執と学苑会中執、文連、研連中執の部屋、および会議室がありました。つまり社学同と民青の拠点が正面に向き合い、その横に文連と研連の執行部室があるので、いきおい研連と文連や学生会との交流や活動がひんぱんになり、討論も活発になっていました。

11月には研連大会を開いて、対案を出す運びになりました。研連事務長としての私はそうした集約を行っていました。でも、オルグや政局に頭を使うレベルで、理論的なことは私は苦手です。政治研究部の岡崎さん、黒田さんや夜学研の伊藤さん、経済研の田口さんらに、世界情勢や教育行政についての議案作成に協力してもらいながら、対案を作っていました。学生会執行部もⅡ部研連が対案を出すらしいというので、「がんばれよ！」とアドバイスをしてくれます。私たちも学生会のメンバーに、学生大会の仕組みやポイントを聞きました。そこでわかったのは、「スト権確立」の方針が通っても、人事案まで提出しなければ旧日共執行部がどうにでも変更できること、財源を確保すべきこと、それに学生大会での勝利を確実にするための事前のオルグが欠かせないなどということです。

そこで役割分担をして、文章を書くのは各研究部の理論家にまかせて、私たち執行部は代議員オルグに集中することにしました。票読みをすると五分五分です。私は雄弁会の縁から、各地の選挙の応援などに行っていたので、票面みの重要性や有権者のオルグも見てきました。研連から、予算やイベントでの便宜をはかってもらいたい各研究会も、対案には賛成して、協力を約束してくれました。

また、半信半疑の反日共系の文学部と政経自治会もボイコット戦術はやめて、大会に参加すると決めました。この二つの学部の代議員は反日共系がてこ入れして、多数が研連の対案に賛成するはずですが、法学部と商学部が民青の牙城ですが、研連のサークル仲間たちが、クラス代議員選挙で立候補していた日共と競合してくれています。ことに商学部から何人も「代議員になったぞ！」という報告が入りました。法学部は少しですが、やはり代議員になることができました。

人事案は私がまとめることになりました。誰も執行部入りは辞退します。「いやー、それは会社があつて難しい」と、Ⅱ部の学生なので、なかなかやれる人がいません。最も頼りにしていた政治研の岡崎さんに学苑会中執委員長をお願いしたのですが、固辞され、大会の議長なら引き受けるということにしてもらいました。この人は田口富久治教授の、Ⅱ部での一番弟子で、頭もきれ政治力もあつたためです。

次には政経学部のML派の酒田征夫さんに頼みました。彼は夕張炭坑の出身で、演説は上手いし、セクツ的ではない人です。涙ながらに熱烈に語るのはこの人しかいない、と次善の人選でした。交渉に行ったところ、「やってもいいけど、実は学費が払えなくてもう除籍になったか、なるところなんだ」と言うのです。これには困りました。私は、勤めていた会社をたまたまやめて、それまでの貯金で凌いでいたのですが、こちらも余裕があつた訳ではないのですが、3万円だったか貯金が残っていました。

それを貸すから、「まず学費を払いなさい」と渡しました。当然のことながら学生でないと委員長にはなれないからです。「1年以内に返す」と言いつつ、結局、返せずにのちに夕張の石炭で作った置き物を「すまない」と、ひとつくれました。

本当は新しい学苑会人事には党派的な人は除きたかったのですが、人事案が埋まらないので窮余の策でもあったのです。同時に、対案を出す研連からも、中執に入らないのはまずいということになりました。そこで、研連委員長でノンポリ、責任感の強い岡田さんが中執副委員長に、研連雄弁会の反日共系で、溶接工の仕事をやめたばかりの水島さんを学苑会事務長に、私が財政部長を引き受けることにし、法学部で軽音楽研に所属する人にも入ってもらいました。それ以外は、文学部と政経の人々から党派的な人々も含めて寄せ集めながら、やっと人事案を対案にくっつけて、研連執行部案を作りあげました。

学生大会の勝敗は、選挙と同じで当日よりも前日までの活動で決めます。学生大会前は、民青側も必死でした。研連執行部が反日共系になってしまったのが失敗だったと、「トロツキスト重信のニコポン外交にだまされるな」など大書の非難をしていました。

(4)学費闘争方針をめぐる学生大会

Ⅱ部の学生大会はⅠ部の団交の日、11月30日に始まりました。当日には1票か2票差で、私たちが日共系の執行部を不信任、対案が通るという見通しが立ちました。Ⅰ部はすでに、記念館で団交を行っている最中です。この団交が決裂すれば、既に確立しているスト権を行使して、駿河台校舎正門にバリケードを積み上げることになっていました。学生会中執と連絡をとりあうと、記念館は満員の学生、教職員を含めた4千人以上が団交中です。

そんな中、私たち学苑会の大会は、午後7時からすぐ近くの91番教室(600人収容)で始まりました。まず、高橋委員長以下、日共系の執行部が壇上から学生大会開催宣言を行いました。彼ら現執行部は全員、壇上に座っています。大会前に、学苑会中執宛に研究部連合会執行部による対案の方針案を提出したので、高橋委員長らも緊張しています。

これまで、反日共系は殴ってインターナショナルを歌って、デモの隊列を組んで出て行く、というのがお決まりの流れでしたから、少々の暴力に耐えればすむことで、気にもならなかったのです。でも、今回は手続きを踏んで大会に参加しています。91番教室には入りきれないほどの学生が集まっています。通路まで入れると1000人近くはいます。前方に代議員、通路を挟んだ後方にオブザーバーでぎっしり。民青の動員も多いのです。

大会開催宣言の後すぐに、大会が正式に成立しているかどうかを、代議員を点検するための資格審査委員と議事運営委員の選出から始まりました。これまでは、あらかじめ学苑会中執側の決めた学生が立候補し、シャンシャンと決まります。でも、今回は違います。これが一番大きな勝負ともいえます。私をはじめ打ち合わせていたメンバーが勢いよく手を挙げました。ここで採決によって一人ずつ議事運営委員を選び、議事運営委員会を構成することになります。

まず議事運営と資格審査の二つの委員を選びます。議事運営委員が資格審査委員を兼任してもいいのですが、この議事運営をどちらの主導権で行うのかが、大きな分かれ目で、同時に票読みの色分けが初めにはっきりします。このときは一括でなく、一人一人選んでいって、各5人ずつ選出したように記憶します。私の票が多数だったのは、私が文学部の反日共系の研連やノンポリの他の学部でも顔を知られていたためです。

その結果、私が議事運営委員長と資格審査委員長になりました。当時、私は2年生。21歳の誕生日を迎えた直後の秋のことです。この学生大会のすぐそばでは、バリケードを決するⅠ部学生4千人をこえる団交中です。

そして、こちらは日共に対案を突きつける、明大の歴史的な大会として、私たち研連の主導のもとで始まりました。議事運営委の中からまず議長団を選出しました。これは打ち合わせどおり、政治研究部の岡崎さんが議長になりました。彼は「策士」で、こういう時にはうってつけの人物でした。そして、他にも副議長、書記を確認。順序はもう覚えていませんが、議長団を選出した後、代議員の資格審査が行われました。日共系の高橋学苑会委員長らは、もともと反日共系の文学部自治会(駿台文学会)と、政経学部自治会(政経学会)は、認めていません。

まずその参加をめぐって激しいやりとりがありました。これは採決を行って、反日共系執行部を認めることを採決しました。このように、反日共系に少しずつ有利に議事が始まりました。しかし議事はたびたび中断されました。学苑会中執の主張を反日共系がはげしく批判し、又、研連対案に対する日共側の批判に研連の政治研究部中心に反論をくりかえします。

学苑会高橋中執の日共系議案と、研連対案の基本的な対立軸は、教育政策・国庫補助をめぐる論争とスト権をめぐるものです。高橋委員長は「この大会で、スト権を確立し、一週間以内に全学支持投票を行う」と提案しています。研連案は「スト権をこの最高決議機関である学生大会で確立した後、すぐにストを執行すべきだ」というものです。論争がくり返されましたが決着がつきません。会議の途中、団交決裂を告げるI部の学生たちがなだれ込んできて、600人収容の91番教室は1000人以上の学生であふれました。これなら本当に学園が変わるかもしれない、大変なことになるという雰囲気になりました。

(資料によると団交の席上、午後9時15分、値上げ問題を白紙撤回するための緊急理事会開催を求めた学生側の要求に対して、長野理事長がはっきりと拒否した。そのため学生会は、これ以上話合っても誠実な答えは得られないとして団交を中止した。直ちに抗議集会にうつった。このため、全学闘争委員会は、駿河台本校でも1日から突入することを決議した。)

対案委員長候補の政経学部の酒田さんは、切々とした演説をしてくれました。「学友諸君、正義の闘いは今、ストライキとして始まろうとしている。昼間部の築くバリケードを、私たちの手で、解体するのか。否否否！われわれは、学生として、彼らと共に学費値上げ反対を訴えるべきだ！」。日共も負けてはいません。大論争が続きます。

手順としては、まず高橋中執の、議案を採決して否決して、そのあと研連対案を採決するのです。私たちは当初から、論争になれば強行採決はやめようと、議長の岡崎さんと話し合ってきました。なぜなら、混乱に乗じて民青が、旧執行部の正当性を主張し、二つの学苑会になるような、民青の戦術にハマらないようにすることです。

そのためには、夜間に学ぶII部学生にとっては苦しいけれども、二日間の大会になってもやむを得ない、と予測していました。しかし出来るなら今日夜中かかるとしても決着をつけたい。なぜならもうすぐ零時には、昼間部のバリケードが築かれるからです。また、討議は打ち切りたくありません。そして、絶対に暴力的に対処させないこと。それを反日共系がおろかに暴力を振るえば、劣勢の民青は待ってましたとばかり神田地区民青を動員し、学生大会を潰しにかかるからです。

そこで、ブント系の学生会にも、II部の反日共系にも、絶対に暴力は振るわないこと。それを守ってほしいと約束していました。

両者の演説が続く、各代議員の質問が続く、長引いてしまい、結局、午前3時30分すぎ、明け方に審議を打ち切りました。予定の審議を1日目に終えないと、明日、又、さらに継続審議になる不

安があったため、明け方まで討議しました。代議員たちが積極的な時間延長を望んでいたため、審議が続いたのです。4時近くになって私は動議を出して明日の継続審議を求めました。そして、12月1日に再び、91番教室で決定戦を迎えることにしました。外ではI部の団交が決裂してデモ、抗議集会、バリケード作りが行われています。

明治大学新聞は、この日のことを、次のように記事にしています。「4000人を集めた30日の大衆団交が決裂し、怒れる若者たちはスクラムを組み、記念館講堂から抗議デモに移った。このダイナミックな怒声と足音はさしもの本館をゆるがし、緊迫感を盛りあげた」。こうして午前0時近くから、バリケードが築きあげられるようになりました。

学生大会を継続審議とした私たちが会場を出ると、先にもふれたように宮崎先生がバリケードに駆け登って、「国破れて山河あり」と始めたのでした。うずまく学生の波の中で、私たちは、「勝つぞ！ 明日は勝とう！」と代議員たちと握手しました。

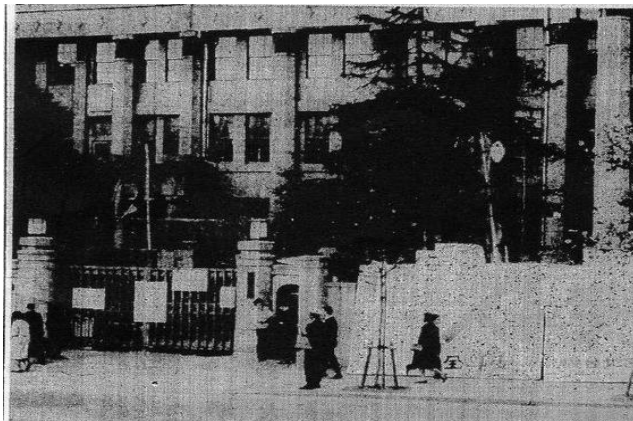
私は議事運営委員長として岡崎さんと明日の手順と人事案をもう一度確認し、明日は勝てること確信していました。私は、責任感と情熱で胸が満たされるのを感じていました。

(5)日共執行部案否決 対案採択

(バリケード中の明大記念館)

大会2日目は、民青の側が妨害行動に出てきました。私の議事運営が不当であると不信任動議をつきつけました。

民青の代議員がトイレに行ったときを狙って、議場封鎖宣言をして、1票も2票も締め出して採決し、無効にしたなどと、騒ぎ立てていました。そして、動議を繰り返して、議長団不信任とか、議事運営委員長不信任案を提出しました。一



方、研連からも、文学部自治会、政経学部自治会側からも発言を求め、日共高橋中執批判、議案批判を繰り返しました。どちらにも流れる浮動票が十数票あります。

こうして、2日目の遅く午後11時近くになって、学苑会中執案に対する採決を行うと宣言して、私が議場封鎖を指示しました。丁度、民青の人が議場の外に出ていたのに議場封鎖をしたと、社研代表が私の不信任動議を提出しました。

岡崎議長団は却下して、採決に入りました。「学苑会中執の総括運動方針案ならびに人事案に賛成の人は代議員票を挙げてください」と、岡崎議長が求めました。挙手している数を数えたものを、私が集計し、議長団に提出する役割です。オブザーバー席から、カウントのミスがないか、民青も反日共系も、同様に数えています。もう忘れてしまったのですが、日共系執行部案は賛成より反対が5票程度上回りました。

ワーンと大歓声です。まず、日共系の議案を否決しました。

でも、研連議案に対しても、棄権票が出れば同数くらいになることも考えられます。続いて研連執行部によるスト権確立を含む運動方針案の採決が行われました。やはり議長に促されて、挙手を求めました。先の挙手で色分けがついていました。棄権した人が手を挙げるがどうか。

まず、賛成の代議員の挙手を求め、私たちがカウントしました。68票です。次に反対の代議員の挙手を求めました。すでに、賛成をカウントした段階で、1票差で勝ちそうだとわかりました。壇上の議長団に反対票67と記して渡しました。岡崎議長が「賛成68票、反対67票です。研連から提出された対案が可決されました。」と宣言すると、満員の会場は大騒ぎです。

昼間部の人もたくさんオブザーバー席でみえています。すかさず研連の対案の人事案で委員長になる酒田さんが「現学苑会中執は否決され、研連の対案が承認された。高橋学苑会中執に対する否決は、不信任であり、即、現執行部は辞職すべきだ。」と動議を提起しました。それをうけて議長が動議の採決に入り、賛成71票、反対64票で不信任案を可決しました。続いて研連対案の人事案が採採択に付されて、72票対44票で採択されました。

「この結果、研連執行部案が人事案ともどもⅡ部の次期方針として承認・採決されました」と、岡崎議長が言い終わらないうちから、ドドッと反日共系は拍手歓声とともにオブザーバー席から壇上へと、何十人も駆けあがってきました。

感動して泣いているサークルの仲間もいます。岡崎さんが、「静粛に願います。私たちは、全学生の公正な意志によって、最後まで学生大会を成功させる義務があります。無法は許しません！」と叫びました。こういう時は岡崎さんは役者なのです。民青の高橋委員長が議長に演説させろと要求しました。岡崎議長は許可しました。

「学友諸君、今大会は不当だ。われわれは、リコールまたは学苑会民主化委員会を組織するだろう」と宣言して壇上を降りました。他の執行部も続きました。

議長団に促されて、対案側の人事の新執行部が読み上げられ壇上に次々と上がりました。酒田委員長がスト権確立の勝利宣言と、今日の今から全Ⅱ部学生の意志としてⅠ部学生会とともに、バリケードを砦として、学費値上げの白紙撤回を求めて闘うと演説しました。

ああよかった、と私もほっとしました。次々と壇上に学生が駆け上がって『国際学連の歌』を歌い、残った代議員やオブザーバー一体となって『インターナショナル』を歌いあげ、拍手で大会を閉めました。もうすでに12月2日の午前1時になっていました。

あの時の興奮は、大変なものでした。1000人近い学生が、昨日、バリケードを築いてそこに残ったⅠ部学生とともに、夜の正門から駿河台下、お茶の水へとジグザグデモで闘いの勝利を祝いました。

12月1日をすぎた2日の、寒い夜気の中、みな熱狂的にこの日を祝い、闘いへと一歩進みました。私たちは次のプラン、引き続き破れた日共系高橋執行部がどう出るか、大学学生課がこの大会をきちんと認めて、こちらに予算を回すか、これからの実務的なことの多くをどう実現するかで、頭がいっぱいでした。

日共系は翌日に正当性を認めて、会計事務などを引き継ぐことに同意。「学苑会民主化委員会」で、対抗する方針を採ったようです。その結果、大学当局もすんなりと私たちを認めて、当局が学費と一緒に会費徴収している自治会費を、新執行部に支払う手続きも順調に進みました。私は財政部長を引き受けました。



(1) バリケードの中の闘い

大学当局は私たちがスト権を確立し、バリケードを築いた頃、どんな動きをしていたのか、宮崎学生部長の本から、追ってみました。

11月26日には生田校舎でも又、神田の大学院でも大学評議会の開催が学生側に阻止されて流会となっていました。30日の団交

を控えていた頃です。先述したように、66年10月から11月の学生側の要求に対して、進歩派と言われた小出学長は学費値上げを再考していました。「どうだろうねえ、こういう状況になっては、学費値上げは、もう取りやめようじやないか」と、宮崎学生部長に切り出したのです。それに対して、宮崎先生は即座に、反対をとらえて、その考えを封殺してしまいました。

そして、ストライキになって評議会開催が出来ないままの事態に対して、大学側は、「臨時連絡協議会」を設置したそうです。(構成は、常勤理事、一・二部教務部長と学生部長で、「その性格は、法人と大学(教学)の間の連絡・調整機関とされ、学長が中心となって運営し、学長に事故があるときは、教務担当理事が代わることとされた。’)そして、学生の昼間部夜間部のスト権確立とバリケード封鎖に対して、12月1日付で、休講を告示しました。

「11月30日、記念館において、理事会と学生会の間で行われ教職員も参加した『学費問題全般』に関する話し合いは、午後9時15分ごろ学生側から、話し合いが打ちきられ引き続き一部学生は、大学を占拠する実行使を行うに到った。午後、10時25分、学生側は、大学院、小川町校舎を除き、一号館二号館、四号館五号館七号館九号館十号館十一号館および図書館を障害物でもって封鎖して、教職員の出入りを拒否する状態に立ち到った。12月1日、学長は告示を発し大学の正規の授業を力によって妨害しないよう要望したが、学生側がこれを聞き入れないので、やむなく休講の措置をとった。昭和41年12月1日 明治大学」と告示されました。

又、バリケードによって、大学構内に入れぬ分「昇龍館」という神田の大学近くの旅館を学生部臨時本務所兼宿舎としていたようです。ここで、学生側の昼間部全学闘争委員会の大内義男(工学部)副委員長福島英昭(経営学部)小森紀男(政経学部)書記長は菅谷俊彦、夜間部全二部共闘会議議長は酒田征夫(政経)岡田征昭書記長(研連委員長 文学部)と、コンタクトをとっていたとのことです。そして、昼間部が主導権を握っていると思われたと、宮崎先生は記しています。当初は、昼も夜も基本的に共通した学費値上げ白紙撤回を求めていたので、恒常的連絡は昼間部がとっていたのでしょう。

私たち二部の新しい学苑会執行部は、まず民青の高橋中執との引き継ぎを求めました。当時は新執行部を認めずに、印鑑や会計なども引き継ぎを拒み妨害活動に出てくることも、私たちは想定しましたが、整然と多数決で学生大会が行われたのは衆知の事実だったので、潔く、日共側も引き継ぎに応じることになりました。

66年に学生が管理運営権を持っていた学生会館には、これまで三階に私たち研連執行部と高

橋学苑会が隣り合わせにいました。その新しい学苑会室から、日共民青系の人びとに替わって、私たちが執行する役割につきました。

私たちは、民青執行部と誠実に引き継ぎを行いました。歴史的な各議案や決議、備品に学苑会の財産日録、それに会計。私は民青の財政部長から、学苑会の残高確認の上、帳簿も引き継ぎました。彼らは、バリケード封鎖に対して「学苑会民主化委員会」をつくりましたが、後に党内の中国派内部抗争で、力を失っていきました。私の知る限り民青の中心をなしていた社研は、中国との友好を訴える人びとが多かったのです。彼らは、後に活動から身を引いたのか、大学でも見かけなくなりました。

二部の私たちの砦は、バリケード封鎖した大学の学生会館に隣接した11号館が中心でした。学生会館全体を学生が掌握していたし、その三階に神田地区の昼・夜間の執行部がいました。この執行部と別個に、学費闘争の機関をつくっていました。

二部は、学苑会の他に、「全二部共闘会議」として、学費闘争を闘うことにしていました。

当時、学校当局・学生部や学生課とはパイプもあり、私は、財政として学生課の担当と予算決議にそった預かり金(入学時、学費納入時、大学側が徴収している学生自治会費や助成金)の、受け取りなどで、頻繁にやりとりをしていました。

又、大学当局の備品の使用持ち出しや教授の研究室への立ち入りは禁止し、執行部が安全管理するという方式で、昼間部がその責任を負っていました。

私は二部共闘会議執行部に加わらず、学苑会の仕事に集中していたので、学館に居ることが多かったのですが、学館前の広場に面した商学部などを中心に多くの学生が、バリケードの中に泊まり込み態勢をとっていました、夜間学生は、そこから会社に出勤する人も多くいました。当時の学生やバリケードの様子を考えると、69年以降、東大闘争を経たやり方とは違っています。66年の私たちは、学生大会の決定に自らを制約されることを大切にしていました。反対派と同じ学内や学生大会で、論争しながら妥協点を見つけていくような闘い方です。学生大会などの決議機関を無視して、力の論理で占拠し闘おうとする党派的な活動体制は、全共闘運動の流れに乗って東大闘争への党派的支援の方式の中から、68年秋以降強化されたと思います。

明大の66年の私たちのバリケードストライキ闘争は、自らがバリケードの中で、秩序を自主管理として作り出さなければならないという考え方に立っていました。

当時の明大の政治的環境は、第一に出来たばかりの学館の管理、第二に60年代から日共系職員と党派闘争を繰り返しながらブント系が維持していた生協活動もあります。第三に再建大会途上の全学連の主力をなす明大社学問の役割。そうした社会的条件に規定されていました。

バリケードの中の日常活動は、自主管理カリキュラムに基づいて講演会や学習会、討論会、又、サークルの発表会などが盛んに行われていました。初仕事は直ぐ貸し布団屋から、確か200程の布団を借りたのを憶えています。これらは、自治会費で支払うのですが、バリケードの中に布団をトラックで運び込んで宿泊に使うためです。

その後も私の財政部長時代(66年~67年)必要に応じて、よく貸っていました。もう、値段もすっかり忘れてしまいましたが、神田にあった貸し布団屋とは、私が一番なじみだったでしょう。学館前の11号館に200の布団を運び込んでも、足りなかったと思います。

夜間部は、夜、バリケードの入口にドラム缶で焚き火をしながら、監視門衛のローテーションを組

んでいました。見回り組、他は学館前広場で大きな立て看を、いつも誰かが書いていました。又、当時は鉄筆とガリ版でビラを作り、それを一枚一枚謄写版で刷り上げる作業も、あちこちで行われていました。

大学は休講でもサークル活動やその為の活動の場は、狭い部室のみならず、バリケード中の広い教室の空間で、軽音楽やジャズ研や空手まで、広々と練習出来たし、各研究部の発表会も自主講座に組み込みました。

明大二部の演劇部は、GちゃんH君と、ヒッピーの始まりをつくったと称する人びとがいて、彼らも自主管理に参加し、不思議なパフォーマンスをやったり新宿西口や風月堂へと、ヒッピーを広げていくころです。唐十郎とか寺山修司が語られ、キューバのゲバラとカストロのどちらが革命的なのかを論争し、朝鮮文化研究の展示会や、ごった煮のよさがありました。

民青も反対しつつ、共同しています。学館二階には、「談話室」と呼ばれるロビーのような空間があり、自動販売機も置かれてコーラとファンタを売っていました、又、生協の食堂も学生の要求で開いていました。冬の寒い中、ジグザグデモを一日2〜3回はやって、氣勢をあげ、お茶の水駅で市民や店主への呼びかけやビラを撒いたりしていました。

バリケードの中には、いろいろな人が来ていました。講演に呼ばれてその後、気に入ったと、左翼評論家で泊まり込みに加わる人もいました。近所の文化学院の学生や高校生も、バリケードの中で、人生相談に来て、居心地がよいのでずっと加わっていました。

サイケ(サイケドリックから採った)と呼ばれた家出してきた高校生の少女は、バリケードの中で、抽象画を描いては、学生たちの演説アジテーションや討論をじっと聞いていました。みんな、お互いに興味を持ち、悩みを聞き合い、又、次々と当局との闘争方針を打ち立てては、交渉し又、闘争し会議する、という日々を12月から年末年始1月中ずっと続けていました。

寒い冬、学館のプラタナスの木の下には、いつも屋台が留まってお金のある人はラーメンを食べることが出来ました。又、直ぐそばにスナックも、ストライキの後に開店していて、3時過ぎまでやっていました。これらは公安当局に関わりのある者たちだという噂でした。当人の一人が「公安に頼まれて情報収集している」と打ち明けたとのこと。それ以来、そうした店は、行かないようにしていました。

又、お茶の水の学生会館の側の店に学生たちの主張を伝え、協力をお願いします、と訴えかけていました。おかげで、後にも、学館にガザ入れがある時には荷物を預かってくれる店もありました。私の生活は、当時アルバイトで、2万円くらいだったのだらうと思います。当時は時代としてまだ、ズボンを履く習慣がなく、学校に泊まるようになって、スラックスを履くことがありましたが、通常はスカートでした。もちろん、ヘルメットも被りません。そんな時代です。

当時の私は、研連の岡崎さんに替わってMLの酒田さんを推して学苑会中執の委員長に人事案をつくったように、ML派とは親しくやっていました。ところが、当時、バリケード闘争が始まると横浜国立大闘争のMさんが頻りに明大に訪れて指図をするようになってきました。私はこのMさんの押し付けがましさに我慢ならず、反論すると「君の意見は社会学同の意見だ」と批判されたりしました。

はて、社学同？そうか、私の意見って、そうなのか？レITTERを貼られて、社学同の教育政策を読みました、どこが同じか分かりませんでした。でも、尊大なこのMさんが嫌いで、ML 派と距離を置くようになりました。

(2)大学当局との闘い

こうしたバリケードの様子は、常に当局との激しいやりとりと対峙のなかにありました。

12月2日には、宮崎学生部長を先頭に、神田駿河台正門の前で、バリケードを撤去せよと、呼びかけていましたが、その時には直ぐ正門の91番教室では、「学費値上げ阻止総決起集会」が聞かれていて、二部の学苑会もバリケード闘争に入ったことで連帯の挨拶を共同して行なっていました。

宮崎学生部長によると、12月2日には、臨時連絡協議会を開いたのですが、小出学長が「このような緊迫した情勢になりましたが、多数の方から意見を出して頂き、皆で円満に会議を進めていって下さい。」と挨拶されたのだそうです。それに対して、宮崎先生は「円満とか言っている湯合ではありません、まさに異常事態なのです、このような場合意見が衝突して当然です。大勢を集めればいいということではありません。秘密にわたることもあり人数をもっとしぼるべきです」と、突き上げたようです。

会場はシーンとしたと、宮崎先生の話。ここでは、学費改訂を理事会は早くしたいというのに対して、学生部長は、決定は出来るだけ遅くすべしという意見であったということです。

12月3日には、全学闘争委員会の大内委員長、菅谷書記長と学生部長は大学院の木村研究室で会い、学生に必要な教務事務が行なえるように職員を立ち入らせることを確認し、立て看板を道にはみ出さないとか、机を燃やしたりしないなどを確認しています。もちろん学生自治会側は研究室を占拠したりしない点は、自主管理として徹底していました。

一方、12月5日には、「学生との話し合いについて、a理事会は、当面学費改訂案発表まで学生との話し合いを続けていくが、これまでのような形式では、会わない。b理事会の意志を伝える場を持つために、学生部を通じて、理事会の希望条件を付して話し合いの申し入れを行う。その期日は、12月8日とする。話し合いの場については、第一案は学外の適当な場所、第二案は記念館講堂とする。全専任教員を招集するよう措置する。一般学生への通知方法は、掲示およびビラを用いる。」などを秘密厳守で確認したとのこと。もちろん、私たち学生は、そうした動きは知りませんでした。

この12月5日には、中大でも学生大会でスト権が確立されました。私たちは、すぐ側の中大にみんなで見に行ってお互い喜びあったものでした。中大に駆けつけると、偶然中学時代のクラスメートの女性に会いました。でも、喜んで抱き合ったのもつかの間、「あなた！味岡自治会の方ね！」と睨みつけて行ってしまいました。

「味岡自治会って何だろう？」その時には、わかりませんでした。反日共系のことを、なじっているのはわかりました。彼女は民青になっていたのです。

12月6日には、5時から評議会が開かれる予定と聞いて学生200人が大手町の会場を占拠して、流会させました。この8日に、学生と理事会で記念会館で話会うことを決めました。ところがその後、理事会が話し合いの条件としてバリケードを正面は撤去せよ、というのを出してきたため、学生側は、それは出来ないことと答えました。

そのため、当局は朝日や読売新聞に8日話し合い中止の広告を出しました。学生側は、理事会の一方的なやり方に抗議して又、10日に記念会館団交を申し入れました。理事会と学生側は、こうして交渉や応酬を繰り返して、13日、又、大手町の会場で開かれる評議会で学費値上げ決定が緊急動機される恐れありと、再び200名が会場になだれこんで、三度評議会を流会させました。

12月15日付の明治大学新聞は次のように書いています。

「11月24日から相次いだ和泉・生田・神田の三地区施設(大学院・小川町校舎・和泉教職員研修館を除く)の学園封鎖にともなう学生の自主管理は、その後、平穩に続き、バリケード内では、クラス、ゼミナール、サークルなどの単位による討論会。講演会(講師として福田善之(劇作家)丸山邦男(評論家)石堂淑郎(シナリオライター)津田道夫(政治学者)氏らがよばれた。)が自主的に行なわれている。また、全学闘争委員会(委員長大内義男 工3)や文連・研連なども連日集会やデモを行っており、また執行部の交代でやや立ち遅れていた二部学生自治機構学苑会(委員長酒田征夫 政4)も、ようやく活発な動きをみせ始めた。今までのところ、学園封鎖をめぐるトラブルはみられない(中略)この間、教職員側も各教授会をもつなど事態收拾に取り組み、二、三の学部では、声明文を発表するなど、問題解決への積極的姿勢をみせている。5日には午前11時から本郷の神田中央ビルで、武田孟総長、小出学長による各紙記者会見が行われ、(1)学費値上げの基本方針は変わらない。白紙撤回は考えていない。(2)学生と主体性もって話し合ってもよい、(3)専任教員の増員と質の向上、奨学制度の拡充、課外活動の助成増加など、学生への還元を考えていると語った。一方学生側も同日5時から、駿河台学生会館の四階和室で、斎藤克彦反日共系全学連再建委員長(商4)などが出席して、各社記者と会見し重ねて、現計画の白紙撤回を要求した。席上、学生側は、記者側の質問に答えて『現在は、各大学など外部からの支援は、すべて断り明大の学生だけで闘っている。しかし、法人側が官憲を含めて、学外協力を介入させたら、われわれも外部からの支援申し入れを断らないだろう』という注目すべき発言があった」と記事で述べています。

この頃、各教授会から、学園封鎖解除と理事会との話し合いを求める声明が続きます。「昭和42年度の、学費改訂は、理事会と学生会との間でとりかわされた7月2日の確約書」を尊重して、値上げ決定以前に学生と十分に話し合うことを、各教授会は求めていました。そして、外部介入(警察導入)を行わないように訴えています。又、田口富久治・木下信男・永田正ら進歩的な教授は、私学危機は抜本的な再検討を行うこと、又、一大学内においては解決しえないので、国庫助成運動を行うようにと、呼びかけていました。それに対して、学生側は反対し、日共系学生サークル、学部自治会のみ賛成しています。

(3)学費値上げ正式決定 (写真 和泉校舎正門バリケード)



そして、理事会は学生側の話し合いに応じないまま、12月15日、東京プリンスホテルで、理事会を行って学費改訂を決定しました。

そして夜、記者会見でそれを発表。宮崎学生部長にも、そのことは事前に伝えず、決定後、「昭和42年度以降の入学生に学費等の決定について」という文書を学生側に渡すようにと、昇龍

館旅館に届けてきただけだったのです。理事会は、誠意がなく唯、学生を恐れていました。結局、宮崎学生部長が学生会館に出向いてその決定書を、昼間部と夜間部の大内、酒田両委員長に、学館前の路傍で渡し、値上げ決定通知を行いました。

二人は、その場でその文書に目を通した後、受領を拒否して、直ぐ文書を返却したと、宮崎学生部長は記しています。その長野国助理事長名の12月15日付の理事会の文書は、「昭和42年度以降の入学生に対する学費等の決定について」という文書です。それは、これまでの経過を自己弁護的に述べて、「やむを得ざる事情を諒らんとされんことを望んでやみません。」として別紙に、学費改訂額表を添付しています。

主旨は、入学金授業料の改訂で、二部の学費は改訂しないとしています。入学金3万円を4万円に、授業料は文科系5万円を8万円に、工学部を7万円を11万5000円とするなどが記されています。このように、12月15日、理事会側は、正式に値上げを通告しました。

一方で、12月18日、記念会館で、「全日本学生自治会総連合会再建大会」行われています。「全日本学生自治会総連合会再建大会」明治大学新聞(12月29日付)では、「三派系・全学連が誕生」という書き出しで、当時の再建大会の様子が書かれています。

「今回の全日本学生自治会総連合会再建大会は、東大、早大、中大、同志社、三重大、和歌山



大、広島大など35大学、171自治会が参加、『支配体制への攻撃』をテーマに徹底的な討論が展開された」としています。

第1日目は17日正午から大田区区民会館、1500名。18日、2日目はバリケードの中の明大記念館。19日、最終日は再び大田区区民会館で、賛成178、反対なし、保留2(代182名)で可決しました。そして、21人の中執委員と、その互選によって明大からは齋藤克彦委員

委員長と中沢満正組織部長が選出されています。



こうした、全学連再建は、全国の模範として、明大学費闘争の勝利がかかっていました。冬休みを迎えつつ、バリケードは死守され、ローテーションを組んで神田地区だけで数百人の学生が泊まり込んでいました。こうして、66年は越冬闘争として、闘われて、新年を迎えます。

齋藤克彦・全学連委員長

(4)裏工作 (写真 生田校舎バリケード)



明大学費闘争は、12月からストライキ自主管理闘争に入ったことで、丁度、再建された全学連党派の思惑も作用して、個別の大学の闘争の実情はどうあれ、非妥協性へ非妥協性へと運動が流されていく傾向にありました。

後に知ることですが、ブントは党派的利益からも、徹底抗戦で持久的に闘うことを主張し、中核派は一切の妥協を排した闘いを主張してブントの方針を批判していました。又、ML派は横国大のMら外人部隊が、明治の二部のML派を拠点として、党派的活動をしはじめました。

バリケードの中の67年正月、私が財政部長をしている学苑会中執の隣の会議室を開けた時のことです。横国大のML派のMら外人部隊が中心となって赤い毛沢東語録をそれぞれが持って、お経のように唱和しているのに遭遇し、仰天してしまいました。ちょうど日本共産党は日共内の中国派との対立から、中国人留学生などの住む「善隣会館」の管理運営を巡って、暴力的対立となっていました。

ML派はその「善隣会館」闘争支援から毛沢東思想に染まっていったようでした。以来、私はML派、ことにMを毛嫌いするようになりました。その分、文連や昼間部学生会の社学同の人々とは、近くなっていったと思います。

ML派はその「善隣会館」闘争支援から毛沢東思想に染まっていったようでした。以来、私はML派、ことにMを毛嫌いするようになりました。その分、文連や昼間部学生会の社学同の人々とは、近くなっていったと思います。

バリケードの自主菅垣の一方で、理事会は学生との話し合いは正門のバリケード撤去がなければ応じないとしつつ、12月15日、一方的に値上げを正式に表明しました。そして、それ以降、呼応して体育会の「学園正常化運動」も、日共民青系の「学園民主化」も、教授会の「理事会当局と学生双方の話し合い封鎖解除」も、激しくなり煮詰まっていました。

こうした中で、革命を求めて徹底的に抗戦せよというような乱暴で無責任な論理を押し付けられるように聞こえて、非党派の私達は悩みました。

ノンセクトラジカルや研連、文連など昼間部執行部で話し合いました。全学生への責任を負う立場から言えば卒業したり学生たちの単位はどうするのか。白紙撤回以外の收拾はないのか?よその大学の党派介入は、当局の体育会のみならず、警察の介入をまねくのではないかと、研連、文連など、いわば「良識派」の人々は危惧する意見提起をしていました。

今からとらえると、情勢は民主的に学生大会で、收拾を諮る時が来ているのに、逆に、全学連再建大会を経て、断固非妥協に闘うという党派の競合と介入が、闘争方針をつくっていきました。このまま行けば自治も失う、というわたしたちのそんな考えは党派の者たちからみると、「学園主義」です。こうした妥協主義は日帝の帝国主義的再編に組み込まれるものだと批判されます。しかし、党派の要求通りにすすめば、権力の介入の力で学費値上げと入試は強行されてしまいます。逮捕者・退学者などを大量に出し、自治は奪われてしまうでしょう。

これまで、当局と対峙し、責任を負ってきた明大学生会中執は活路を求めていました。学生たちに責任を負わなければならない。

又、一方、明大社学同のトップのものたちは、再建全学連委員長として全国的な闘いの先頭に立ちつつあり、明大の面子ある闘いの砦として、ブントの拠点として維持したかったでしょう。ブント以外の党派のものたちML派や徹底抗戦の中核派は断固主義でバリケード死守、入試粉碎まで闘うことを主張しています。

今になって、当時の学生部長の考えや、資料から分かるのですが学園闘争を收拾したい、党派や外部の介入で右派や警察権力に粉碎される前に自治の場を取り戻し、妥協すべき点を見つけるべきだという勢力が、こうした12月の局面で動き出していたのです。

私も全学意志をもって徹底抗戦することが可能なのか、悩みつづいた頃です。

「断固闘う」方向を問い「民主的に」学生を動員するために臨時学生大会でもやるべきか…、と考えていましたが、それ以上深い方向も考えていませんでした。私は引き継いだばかりの学苑会中執として体制を整える役割や研連のひきつぎも負っていました。

学費闘争の組織体「全二部共闘会議」には、中執の主要メンバーが中心になって構成し、私は、それに加わらずに学苑会固めの役割分担していたためでもあります。

二部共闘会議議長はMLの酒田さん、副議長は研連の岡田さんもいましたが、政経学部の中核派の花田さんは、徹底抗戦派です。全学連大会後は外部のML、中核派も来て徹底抗戦の主張が強くなっていました。

こうした時期、「裏工作」が始まったのを、2000年以降、逮捕後に当時の宮崎学生部長との話や本で知りました。右翼体育会や学生の正常化圧力の中で当時、他の党派の介入に対して自分たちブントの党派利害からか、又は純粋に責任感のためか個別明大の自治を守ろうとする人びとの動きです。

宮崎先生の本から「裏面工作」。が、浮かびあがってきます。

宮崎学生部長によると、どのように紛争を解決していくのか先がみえなかったので、従来の学生部長経験者の先生方を昇龍館に招いて、お知恵拝借を、願ったそうです。新羅一郎、永田正、和田英雄先生らです。その中で、名案は見つからなかったのですが、新羅教授の言葉が後の宮崎先生を動かすことになったようです。

「『宮崎君。戦争でもそうだけれどね。正面から向き合って対抗していたって埒はあかないんですよ。紛争のときには常に正面作戦と一緒に裏面工作を進めなくちゃ駄目なんだ。裏面工作やっているの』と、言うのだった。『裏面工作』?どうやって進めたらいいのだろうか?」と考えたそうです。直情径行の宮崎先生の頭にはなかった方針でしょう。

その後、新羅先生が道筋をつけてくれたようで、新聞部OBのKから「先生、全学閥の大内君と会う気持ちがおありでしたら手配しますが」と、連絡があり、お茶の水駅から本郷三丁目の方の喫茶店で、始めて大内委員長と会ったとのことでした。

「二回目からは、千鳥ヶ淵のフェアモントホテルの喫茶店。最初は情報交換で、双方ともその主張は公式見解に近いものだった。(中略)しかし、何回も話しているうちに、次第にお互いの苦労や気持ちもわかってきて、何とか打開の途はないものかと思った時、立ちほだかっている固い岩の中にわずかだが解決への可能性の細い割れ目の薄日のようなものが見えてきた。『大学をよくするために学費値上げが必要なのだよ』と言ったのに対し、大内君は『学費を上げて、大学の体質は変わらず大学は良くなりませんよ』とこたえたのだ。(中略)『それでは、学費を上げなければ

大学は本当に良くなるのかね『学費を大学の体質を変え、大学を良くするために使用することを理事会側に確約させ、それを学生側もできるシステムにすることはできないか』こんな風に話し合っていたようです。

大学も又、迫ってくる卒業で、学校教育法による四年生の必要授業時間不足など、現実的問題が問われていました。バリケード封鎖のために卒業できない一般の学生たちに責任を持たない自治会でよいのか、大内さんも悩んでいたのでしょう。

こうして、双方の話し合いを重ねた上で「神田小川町校合の学生相談室で、予備折衝を行った。全学闘争委員会側からは大内君をはじめ、何人かの代表、学生部からも宮崎学生部長の他、副学生部長が話し合った。

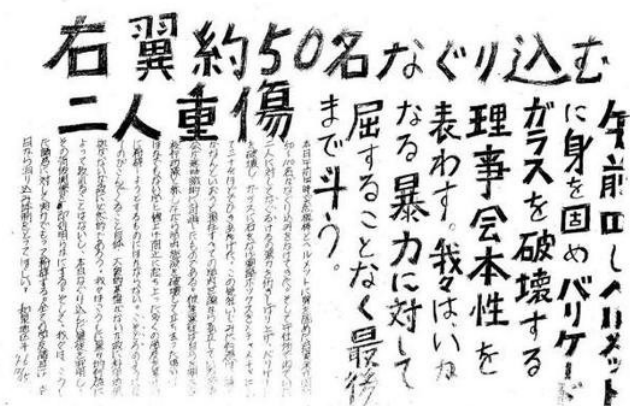
白紙撤回に学生は固執しつつ、妥結の方向に向かっていった。話し合いを公式の場に乗せるために1月20日に理事会と学生側が話し合うことになった。」(「雲乱れ飛ぶ」より)と書いています。

(5)対立から妥結への模索

学生が学費値上げ白紙撤回を主張し入学試験阻止闘争を検討しているとして、1月に入ると、体育会の「学園封鎖抗議集会」が91番教室で開かれました。

以来、理事会の動きと連動するように、学生自治会側に対抗して体育会の暴力リンチが始まりました。

体育会は1月14日「学園封鎖抗議集会」で宣言文を採択しました。一触即発の緊張が続いていました。理事会側が、値上げを公表



してから、黒龍会の幹部と噂される右翼やくざの島岡野球部監督が動き出しました。体育会を動員して、団交でも前方座席を体育会に暴力的に振り分けるなど采配をふるい始めたのです。12月から1月にかけて、この動きが激しくなります。

1月18日に、全学闘争委員会と、学生部長による覚書きがかわされて、1月20日に記念館で、話し合いをもつことが決定されました。

学生は教授たちに共闘を呼びかけました。「私たちは、教授会内の学費値上げに反対する良心的先進的教授諸氏に訴えます。腐敗・墮落した教授諸氏を弾劾し、私たちの共通の目的である『白紙撤回』獲得の為に、私たちとの固い連帯のスクラムの中で、最後まで闘って行こうではありませんか。」と。

67年3月5日「朝日ジャーナル」によると、「定刻の3時間前に、記念館講堂は満員、まわり500人から1000人入れる4つの教室にはスピーカーで流したが、そこも一杯。お茶の水駅から長蛇の列、消防庁から抗議まで来た。団交では、学生が教育のビジョンを要求すれば、理事会は経営の困難さを訴え議論は、かみあわない。この日もむなしく空転」と、記事になっていました。

この日は、恐怖の団交だったのです。島岡監督の指令を受けた体育会、柔遊郭や相撲部や野球部、レスリング部などが、前方座席に座る学生を暴力的に追放して、数百人分の席を占拠しました。そして、壇上で、学生側の発言が始まると「ウルセー・バカヤロー」「だまれ」などと妨害します。

敗けずに学生の多数は、拍手して、壇上のみならず座席もゲバルト合戦となっています。そして、学生側も棒で徒党を組んで対抗措置をとりました。

その後、体育会側は、大学に要請文をつきつけ、「20日の記念館での混乱でおわかりになったように我々は、会場警備にあたっておりましたが学生一般及び体育会員の異常な熱気は、現状については、もはや体育会本部にしては制しきれない様になりました。この事に関し、大学側の今後とられるであろう処置についてどうお考えか、明らかにするよう要請します。1月24日 体育会本部」と、暗に警察の介入を求めています。

25日再び団交が行われましたが、600人収容の91番教室には、体育会ゲバルト部隊が集まりました。学生服の腕を白い紐で縛ってこれからのゲバルトに際して仲間同士の印をつけています。梶棒が運び込まれ、島岡監督が激を飛ばして一触即発の対峙状態でした。この時は学生会の全学闘争委員会も学苑会の全二部共闘会議も流血を避けて挑発に乗りませんでした。

再び、1月21日、26日、大内秀員長と学生部長は話し合いを持ち、打開を求めて、学生部長が個人的に「案」を提起して大内委員長も個人として、この筋でまとめていこう、と話し合ったようです。この「案」をもとに話し合おうとしたことが、後の「2・2協定」妥結につながるものになるわけです。その内容は、異常事態を解決するために双方努力すること。理事会は、学生の要求と話し合っ、学内改善方針を67年3月までに決定すること。学費値上げ分は、別途保管して、3月方針の決定を持ってから予算計上する。それが同意されれば、1月30日から、授業再開が可能となるようにする、という内容です。

そして、「1月30日に学園が正常になった際は、報道機関を通して、大学と学生会との連名でもって、本学の新しい出発を声明するものとする」と、原案は述べています。この妥結案を、宮崎先生は「理事会側も学生側も、大筋において異論が無いようだった。ようやく、妥結への灯がほのかに見えてきたように思われた。しかし、この妥結案の内容を公開の場で確認する必要があった。学生側は、1月28日に和泉校舎で理事会側と学生側との公開の話し合いを行い、その場でこの妥結案を公表して妥結の方向にもっていきたいという意向だった。話し合いを行うことには、理事会側も同意した。

朝日ジャーナル記事の中に『このころ、すでに斎藤克彦三派系全学連委員長と武田総長との間に裏交渉が進んでいた』(67年3月5日号)とある。学生部長・大内委員長の線とは、別に武田総長・斎藤委員長にも交渉があったようである。しかし、全学闘争委員会の委員長は、大内義男君であり、学生部長と大内委員長の話し合いが非公式交渉の主流であったと言ってよいだろう」と宮崎先生は書いています。

斎藤全学連にばかり目を奪われていましたが、大内さんは、学園正常化に集中していて、斎藤さんに同調していたというよりもむしろ、反発すら持っていたようです。

歴史的にみると、こうして、妥結案をめぐる話し合いが行われました。大内さんの出身、工学部生田校舎では、妥結を受け入れました。しかし28日和泉校舎では妥結反対の大衆団交と化していき決着が着きませんでした。決着は再び、29日、神田校舎に持ち越されました。

この宮崎・大内作成の妥結案は、各党派、ブントを含めて明大社学同批判が席捲していききました。値上げを前提としているからです。

そうした中で、1月29日生田校舎ではバリケードは撤去されて、和泉では、妥結反対、神田の29日の団交は流会となりました。「学生部報・号外(1月31日付)」では、「1月29日午後4時記念館講堂で行われる予定であった学費値上げ問題についての会合(全闘委側回答をめぐる)が開かれる前に全闘委の学生たちと、体育会を中心とする学生たちとの間に乱闘が生じ、後者に13名の重傷者を含む負傷者46名を出す異常状態が現出されたので、記念館での会合は中止となった。」と述べています。

二部共闘会議の学生たちが、二百数十人、棍棒ヘルメットで武装して、乱闘が行われたと、外人部隊を中心とするそれら勢力が、体育会を中心とした団交の前列に占める学生らを襲撃したと、号外は述べています。この号外では、その前段で、体育会が暴力で、座席占拠して、団交から、学生会支持の学生たちを追放した結果起こったことでしたが、それらは触れられていませんでした。こうした、暴力流血に対し、打開にむけて理事会と学生側で湯所を移して話し合うことを学生部長の仲介で合意しました。そして、午後になって、大学院第一会議室で話し合いが持たれました。これから、機動隊導入「2・2協定」に一気にすすんでしまう流れに突き進んでいきました。

(6)最後の交渉—機動隊導入

流血の後、29日緊急に場を大学院に移した話し合いは、司会に宮崎学生部長と学生側長尾健。理事側:長野理事長、武田総長、小出学長他7名、全学闘争委員会:大内義男委員長、菅谷書記長他8名、全二部共闘会議:酒田征夫議長、花部利勝副議長他7名の参加です。ここで、28日理事会提案に対して、全学生側の回答を得る場として当局は設定しました。しかし、学生側は白紙撤回を求めて 座り込み部隊 300



余名が、会議終結を許しません。

十数時間後の30日朝、学校当局側(学部長会議)は、警察の出動を要請して、理事たちを「救出」しました。その直前までは、全学闘としても学園の正常化をしたい。次のことが認められれば、理事会提案を受け入れ授業再開のため、即時バリケードを解くというところまで合意が進みました。

(1)理事会が教育・研究財政問題を根本的に解決する姿勢で努力すること、(2)値上げに関しては、実質的に白紙の状態に付しておく様希望する、というところで妥結に近づいていました。結局、「白紙撤回」という字句を認められないとするやりとりや、学生部長からの妥協案などのやりとりが続いていました。

95番教室1000入、150番800入、140番1000入、各教室にはこのように、体育会を含む数千人の学生が膨れ上がって、成り行きをスピーカーで報じられつつ待ちました。

1月29日夜10時前、妥結点と未解決点を確認して、会議を終えて、140番教室で学生・理事会双方が説明会を行なうことになりました。宮崎教授によると、二部の全学共闘会議と他校外人部隊が移動を阻止して缶詰状態になってしまいました。そして、「大衆団交をひらけ」「理事会は学費値上げを白紙撤回せよ」と、入室を拒否して、バリケードを築き、「つるしあげ」が延々と続きました。

「機動隊がきた!」のデマで、浮き足立ったり混乱が深まって、夜が明けました。この頃学部長会議が、警察隊に30日朝7時、理事救出の要請を行なったのです。このことが会議場にも通告されました。昼間部の菅谷書記長は「退場してバリケードを再構築しよう」と、呼びかけました。それに対して二部の側が、継続を要求して対立し、昼間部は会議室から退場しました。しかし、機動隊が来ることがわかると昼間部の大内・菅谷全学闘執行部も会場に戻って、二部の学生たちとスクラムを組んで、インターナショナルを歌いながら機動隊をむかえました。

大学当局は、理事救出の要請のみだったので、7時 15～20分、警察機動隊は窓を破って理事を救出し、撤収しました。こうして、結局、警察の介入に結果したわけです。30日、その日すぐ透かさず、理事会の意を受け島岡監督らが中心となって体育会を動員し、バリケード撤去に動きました。そして、その日のうちに神田校舎のバリケードはすべて解除されてしまいました。

その上で、『学園は理性の場であり、大学内に棍棒などの凶器を持ち込むことは、大学に対する重大な侵害行為である。ただちにこれらのものを、大学外に持ち出し、所持者および明治大学教職員学生以外の者は、ただちに学外に退去するよう命令する。1月30日 明治大学学長』『本日、明治大学のストは、学生の手によって解除されました 1月30日 明治大学学長』『全学闘争委員会、全二部共闘会議の解散を命じる 明治大学学長』正門に通告告知がなされました。

こうして、学生大会によって、決定された学生の闘争機関の解散を当局が命令するという異常事態に至りました。大学当局の暴挙にはげしく対立したのは、和泉と二部の学生指導部とブンドを含む党派の外部勢力でもありました。私のようなレベルの人々も、この機動隊で、逆に闘争の継続を強く主張するようになりました。

第7章 不本意な幕切れを乗り越えて 1967年

(1) 覚書2・2協定

昼間部の全学闘大内指導部は、機動隊の出動を大学が要請したことで、これまで話し合った妥結に沿った收拾しかないないと判断したようでした。一方で、宮崎学生部長も打開を目指していました。機動隊導入後、全学闘も二部共闘会議も学生が消えた、と宮崎学生部長は書いています。「逮捕を恐れたのか、体育会の暴力が分からないが、バリケードが撤去され、昼・夜の闘争機関に解散命令を発しても、中執は学生会・学苑会としてある。学生たちが理事会案をのまなかったから値上げするのは公正とはいえない。」このままではまずいと判断し、学生部は理事会の同意を得て31日正門に学生部長名で以下の告示をしたとのことでした。

「学費問題については、今後も理事会が誠実かつ謙虚な態度で学生諸君の代表と正常な方式に従って話し合い(具体的には1月28日の提案に基づき)最終的妥結をはかり、学園を正常に復することを望む。学生部長は、学生諸君の希望があれば、それを推進する用意がある。1月30日 明治大学学生部長」と、示しました。当時、活動家と見ると、リンチや拉致されるために駿河台の校舎に多くの人が近づけなかったのです。それを宮崎先生は当局側として、体育会と協力しあっており理解していません。

その後、大内委員長から、連絡があり、宮崎学生部長と大内さんは話し合いをしていました。大内委員長の話によると、学内の闘争委員の主旨は同意に至りつつ、最後まで反対という学生もあり、上部組織や応援部隊が強く反対で、公開の話し合いの場で妥結するという了解に至り得なかったと説明したようです。それを受けて、学生部長は理事会に対して、1月28日の妥結の方向を今後

も維持してほしいこと、又、学生の要請に理事会を代表し交渉を担当する人を選出してほしいと申し入れています。そして、同日、武田総長が理事会代表に指名されました。

こうして1月31日、午後7時頃、大内学生会中央執行委員長より、学生部長を通して、申し入れ文書が理事長宛に提起されました。

「大学院の徹夜の交渉で、理事会側が示された内容は、不十分としつつも、われわれの主張をおおむね諒解されていると判断します。よって、これまでの両者の努力を水泡に帰さない為にも、一刻も早く紛争を集約し、問題の具体的な解決のために学生会中央執行委員会と理事会の間で提示された最終案で妥結をはかりたいと考えます。理事会におかれましても充分われわれの意を汲まれて善処されんことを期待します。

調印の場所・日時については、学生部長を通じてお知らせ願いたい。昭和42年1月31日 明治大学学生会中央執行委員会 委員長大内義男」

今度は、理事会側が強気で上記の最終案というのが「学費改訂による値上げについては9月末までの延納をみとめるものとする」という大学院での徹夜のやりとりの最終案でなく理事会側原案での妥結を主張し、やりとりがあったようです。しかし、とにかく、2月1日、生田校舎で調印すると学生会が知らせてきたので、当局側は待機しました。しかし学生側からは連絡が切れてしまいました。

宮崎学生部長と武田総長は、「今度もダメか」と諦めていたところに、2月2日午前1時35分学生側から「これから覚え書きに調印したいと思いますので、銀座の東急ホテルに来てください」と、昇龍館に電話が入ったとのこと。ここで最後の交渉と合意に至りました。

法人側からは理事会代表者として武田総長、介添役として小出学長、学生側は大内義男委員長、川口忠士書記局員、介添役として齋藤克彦全学連委員長、仲介した学生部としては、学生部長の宮崎先生と中村雄二郎(法学部)・吉田忠雄(政経)教授が同席しました。

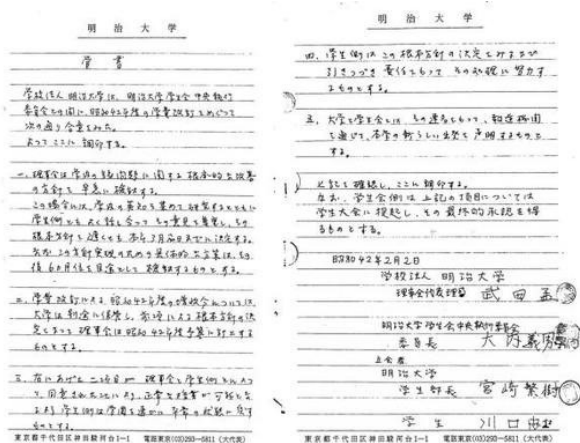
2月2日付覚書に午前4時に署名を終えて、その同じ場所で記者会見を行なって公表しました。

(写真 覚書2・2協定)

2月9日付明治大学新聞で大内委員長は次のように述べています。

「覚え書きは休戦協定だ。学費闘争は、2月2日の学生会中執と理事会との覚え書きの交換をもって終息したのではない。覚え書き交換は、その内容が示す如く、たんに一時的休戦協定を意味するにすぎない。したがって、二部共闘会議や無責任な『外人部隊』が言う如き、敗北宣言協定ではないことは、あきらかである。ま

してや、休戦協定は、私個人と、理事会とのボス交渉によって結ばれた訳でもなく、更に両者との間で、金銭的取引があった如き事実は、一片たりともない。調印は、言うまでもなく、大衆組織の民主的ルールを踏まえ、各地区闘、全学闘書記局、学生会中執の各構成員の了解のもとになされたものである。ただ、本来全学生の了承の下になされるべきであったという点において、不本意な形で、不十分なままになされたということは、素直に全学闘の責任と言わねばならない。そのた



めに止むなく、学生大会での最終承認という形式をとらざるをえなかった。休戦協定を結ばざるをえなかった理由は、大学当局との力関係に専らある。28日団交以後、当局は国家権力を背景として、29日には和泉・生田のバリケード撤去を強行し更には30日には、体育会一部右翼分子による白昼テロ、バリケード撤去という前代未聞の行為によって、更に全学闘の解散命令によって自ら自治破壊の道を選ぶことを通じてわれわれに対する弾圧を仕掛けてきた。このなかで全学闘は、学生諸君の前に登場することすら困難な状況に陥り、そのまま事態が続かぎり、明大の全体的反動の嵐が今後長期に吹きすさび、われわれの社会的発言と行動に大きな規制が加わるばかりか、全国の学園弾圧の典型を残し、全国学生運動の後退も余儀なくされると判断したのである。したがって、休戦協定を結び再度学園を、われわれの手に回復し、長期的闘いの基盤を形成する組織活動の保障を確保し、4月以降、覚書にのっとり闘いを、白紙撤回から値上げ阻止(全学返還要求)、在るべき教育の確立という点において進めるよう結論をください。」と述べています。当時を語る中で、「斉藤さんはもう方針が出せず大内が決めた」又、大内さんは、先輩の生協の篠田邦男のところの一週間泊っていて「一人で泥をかぶるつもりで決め、あとは消えろ。残った人間が、あとはすべてやる」と言われて自分で決めたと回想しているそうです。そんな風に、覚え書き(2・2協定)は結ばれました。今からみると、この協定が、大内さんの言うように当時の条件、力関係からすると、とられるべき次善の收拾措置の方向であったのです。もちろん、「休戦協定」が「全学返還要求」に転換するなど甘く考えることはできません。

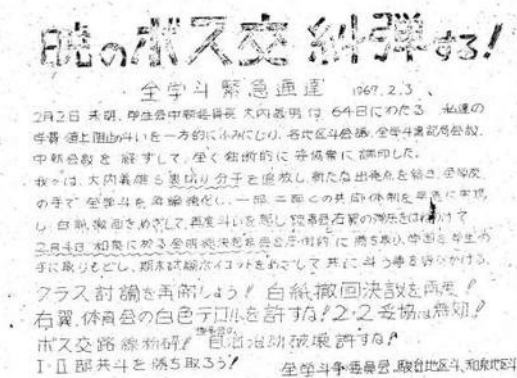
ところが、大内さんらは機動隊導入後、“外人部隊”党派、二部共闘会議に対しては、見切りをつけて独断専行しました。公然と白昼、事態を示すべきでした。

又、もしこの覚書の署名が公然と大学内で行なわれていたら、学生や党派の反応も違っていたはずですが、これまで公然と交渉してきたことの延長に「合意」はあったからです、右翼体育会の暴力は、激しいもので危険もあったでしょう。又、中核やML、ブントでさえ妥結を認め難かったでしょう。しかし、初めに自ら掲げたように「総学生の意思」学生大会に返して、妥結の内容を、確認すれば、正当な闘い足り得たのです。中核やML派が反対しても。

当時、明大闘争は、全学連再建のヘゲモニーあらそいと重なりました。党派の「革命の拠点」という位置づけによると、より非妥協的に闘うことが問われていました。学園闘争はあくまでも改良の闘いです。そこでは本学当局との妥協によって、総学生のよりよい自治をつくること、その中で革命へ参加する人材や層も築かれるでしょう。

しかし、「徹底抗戦」だけ先細りであり、個別の敗北をつくります。個別の敗北はまた、全学連の損失です。この明大の「妥結」の仕方は、改良と革命の混乱、以降の学生運動で「妥協」を許さない悪しき党派政治が凌駕するさきがけとなってしまいました。

(2) 覚え書き(2・2協定)をめぐる学生たちの動き (写真 全学闘アジビラ)
2・2協定をめぐる動きは、私が社学同に参加していくきっかけをつくったものだったと、今からとらえることができます。当時、どの当事者もバリケードの始まりには、



当局の「白紙撤回」を正義の実現として考えていました。

何千という学生たちが集まり、二部でも働きながら活動する夜間大学の厳しい条件に加えて、当局の休講措置の中で多くの学生が通学していました。働いた後の生きがいに、大学で学んだりサークル活動したり、自主管理プログラムに参加することも喜びだったからです。それが、12月15日に正式に値上げが表明されました。冬休みに入り、新年明けと、寒さと、年末年始の休み、見通しの欠如で、人の参加も欠けてきました。

私の方は執行部として学苑会側の役割を忙しく担っていました。

先に述べたように、外部のML派が党派的に動き出していました。自主管理で成功してきたと、横国大のMが明治に常駐しはじめた頃です。中国と日共の対立の中で、日中友好善隣会館へML派が応援に行き、急速に毛沢東路線に近づき、私は彼らと距離をもっていました。そして、ML派から「君の意見は社学同の意見」と言われて、何が共通点かはわからないものの、私は昼間部学生会の人たちとも話す機会が増えました。

又、新年になると団交のたびに右派体育会が、活動家を見つけるとラチして、小川町校舎に連れ込んで、リンチする事件が頻発しました。執行部メンバーは、1月の団交を経て学館を拠点としつつ、集団行動をとって自衛するようになりました。また、機動隊導入に備えて、社学同は中大の学館を拠点に、ML系や二部の人たちは法政大を拠点に、準備しながら態勢をとっていました。まだ二部は学館と11号教室を、バリケード闘争の砦として闘っていました。

その中で1月20日・25日の団交の暴力事件があり、私は学園祭の駿台実行委員会で共同してきた応援団の団長らと体育会暴力に歯止めをかける交渉に走りまわっていました。又、島岡野球部監督の指揮下で、あちこちで暴力が、一触即発で、機動隊が正門に待機する事態が続きました。学校がゴーサインを出さない為に校内に入れず、警備と称して機動隊は待機しています。白色テロは機動隊の目の前で、体育会系の学生に中執メンバーがラチされて、小川町校舎の柔道部の道場に連れ込まれるなど、1月下旬はひどいものでした。

私自身も捕まりましたが丁度、小学校の友人が体育会にいて、助けてくれたことがあります。こうした中で学生会大内・宮崎学生部長の裏交渉が続いていたことは、まったく知りませんでした。ことに、二部は「白紙撤回」路線にあり強硬で、相談してもラチがあかないと判断して排除して裏交渉していたのでしょう。こうして、1月29日に記念館での暴力事件があって、大学院での缶詰団交、つるしあげになっていきました。応援団の友人が、機動隊が入るので大学に近づくと、連絡をしてきた頃です。

私は、学館で活動したり記念館の方の数百の貸布団の返却を応援団の協力を得て処理して布団屋のトラックに返却するなど、様々な後始末に追われていました。すでに1月30日の機動隊導入、大学のロックアウトで、二部は法政、昼間部は中大や明大和泉校舎に移って、拠点にして、活動していました。

2月1日のことです。学館の学苑会室から対面にある学生会室に行って話していた時だったと思います。斎藤さんが、菅谷さん、鬼塚さんかも知れません。「今日とても大切なことを決めたいので、二部の代表も居ないのでぜひ参加してくれないか。社学同の人たちの集まる会議だけ」と誘われました。私は、社学同でもないし党派的な活動はしないと、応えました。「どうしても明治の学生

運動の今後にとって、大切なことであり、今日だけ秘密を守ってくれればいいから。二部の考えも反映したい」と説得されました。

頼られると弱い私です。切羽詰まった言い方が気になって、「二部を代表することは出来ない。ただ個人として参加し自分の意見を言うだけ」という条件で、中大の学生会館で開かれた明大の社会学部の会議に参加しました。その時、なぜ呼ばれ、そして私がなぜ参加してしまったのだろうと、何度か考えることがありました。

会場には、やっぱり、という顔見知りばかりがいました。毎日協力したり、助けあったり言い争ってきた人びとです。そこで、齋藤克彦さんらが、みんなを説得するように語っていました。現在の力関係から、まず、1月28日の理事会修正案で合意して、そこから、自治を守り、次の闘いへとおすすめてほしいということでした。「中核派などが無責任に革命の拠点化を煽っている」齋藤さんらは「改良と革命」について熱心に語っていました。階級闘争は勝つまで負ける、次に、如何に勝つように負けるかということ、その闘いとして今の条件と力関係の中で一つの妥協を作りあげよう。

その中身が、今の自治よりも前進した内容であるならば、よしとしよう。それは改良なしには実現出来ないし、改良は、また革命組織の戦略なしには、ただの改良になってしまう。今、明治の攻防で一定の改良を実現し、今日の政治闘争への条件をつくる、というような主張だったと思います。

意見を求められて、和泉校舎の闘争委員長だった小森さんや齋藤克彦の弟たちが、即座に反対意見を提起しました。自分たちの学生大会で確立したスト権の解除は、学生大会で行なうべきで、党派的に決定する手続きでは決定的に不十分だ、というようなことを言いました。「学生が納得しなし」と。先細りは眼に見えていました。

「改良と革命」の話は分かるけれど、学生大会で決定したことを、困難でも、もう一度、学生大会を開いて決め直すべきだという意見に私も賛成でした。そうしなければ党派の身勝手にすぎないのではないか、そんな風に考えていました。社会学部会議で下部の社会学部メンバーは、学対の指導的な人びとに対して、民主主義を提起したのです。齋藤さんらブントの上の人びとが考えたよりも、学生社会学部の人びとの反対は圧倒的に強いものでした。

討議はまとまらず、ついに齋藤さんは「決着がつかないな。継続討議にしよう」と決めました。すでに夜0:00をまわっており、齋藤さんらは討議の打ち切りを提案し、翌日の継続討議が確認されました。会議打ち切りの後、私は夜遅い中、ひとり学館を出て、仲間のいる法政に向かおうと学館の外で、タクシーを拾おうとしていました。

そこに、齋藤さんと数人が出て来て、やはりタクシーを停めるのに遭遇し、あいさつを交わしました。法政に戻って、何か活動をしていて明け方に休んだので、ウトウトしていたのか、もう起きて作業をしていたのか。「おい見ろよ！お前知っていたんだろ！見てみろよ！」と中核派とML派の人に新聞を投げつけられてびっくりしました。

一面に「明大紛争急転解決。暁の妥結。理事会と学生調印」の記事が目飛び込んできました。ああ、そうか。継続討議を無視して、あれからタクシーに乗って齋藤さんらは調印に行ったのだ。そうか、彼らは順序が逆だったんだ。理事会と大内さんたちの合意があり、それから社会学部の下部への説得をする、そういう順序が決まっていたのか…。無数の学友が逮捕やリンチに立ち向かいながら闘ってきたことの意味をどう考えるのか！という怒りが一瞬よぎりました。

でも「1日だけの秘密でいいから」と言われていたのに「知らない！」と開き直って新聞をじっとみつめました。ただ、悔しくて吃驚しました。継続討議はどうしたのか?!和泉校舎の社学同の人びとの提起した民主主義の方法としての学生大会による解決は、無視されたことが分かりました。明大の学費闘争をどのように全国的な自治会運動の今後に結び付けていくのか?という点においてスマートな集約を保持していきたい、そして全学連のヘゲモニーを社学同が引き続いて主導したい、そんな思いが明大のブントの指導部にあったのでしょうか。ヘゲモニーや中核派との競合に眼を奪われていたのかもしれませんが。

(写真 社学同ビラ)

この調印は2月2日の明け方に合意されたことから、「2.2 協定」と呼ばれました。これが反ブント、社学同つぶしの明白な論理となって全学連内の矛盾を一気に爆発させたようでした。もともと、三派全学連自身が左翼反対派的な思考方法に立ったものでした。他者を批判することによって、自己を肯定し正当化する論理方法だったからです。全学連の党派闘争もあり、中核派は、直ちに責任追及と自己批判要求で、明大学館に押し寄せてきました。ブントと判ると殴られ、自己批判を書かせ学生会自治会室には「剽窃屋齋藤粉砕！」などスプレーで落書きしていきます。調印に署名立合したという当時の齋藤・大内さんらは消えてしまいました。身の危険を感じたと思います。



右翼、権力に加えて、中核派の暴力とリンチが社学同に襲いかかりました。ブントも他党派に自己批判しつつ「齋藤らを許さん！」と早大社学同などは、齋藤さんを探しまわっていました。2月2日のあとも2月1日に中大の社学同会議で妥結に反対していた齋藤さんの弟や米山さんらが、学生会中執の部屋に留まっていました。殴られてもスプレーの落書きをベンジンで、又、消しながら毎日繰り返して居続けました。

ML派の畠山さんは、「何かあったらオレを呼べと！」と助けてくれたことがありました。学苑会の対面の学生会に中核派がリンチに現れると、畠山さんと呼んで仲裁してもらったこともありました。殴られても、殴られても「学生に責任をとらなければならない」と居つづける数少ない明大社学同の人に同情し連帯して私も、対面の学生会の方に行って作業をしていました。こんな風に思いがけない展開になってしまったのです。それでも、二部としては白紙撤回を求め、入学試験阻止闘争方針を決めて抗議を続けました。後に知ったことですが、神田署から学長と学生部長に「被害届」を出すように求められたようです。

理事救出の警察出動した件で、被害者からの届出が必要ということらしい。「学生部長は学生を守る立場にある。その者が処罰を求めるような届けを出すことはありえない」と拒否しました。後に、学長が被害届を出したと聞いて2月8日、宮崎学生部長は辞表を提出し、3月一杯で学生部長を辞めています。

又、私は早大や明大の社学同の友人たちから、明大社学同を立て直したい、社学同として加わって欲しいと誘われて社学同への加盟を決めました。21才の春のことです。これから、新入生を新しく迎える準備の頃です。明大学費闘争は、私の20歳から21歳の、変革のエネルギーを注ぎ、献身し尽力した生き方でした。過ちをふくめて私を、私たらしめた誇りある日々として、私の生に刻まれています。

(第一部終了)

※ 第二部以降は今後執筆予定です。掲載時期は未定です。